高岡市埋蔵文化財調査概報第27冊

# 石塚遺跡調査概報Ⅲ

— 平成５年度高田地区の調査 —

1995年３月

高岡市教育委員会

1．調査地区全景（西）

2．工房址ＳＸ07遺物出土状態（南）

# 序

高岡市街地の南西郊外，石塚・和田地内より，弥生土器をはじめ種々の遺物が出土することは，早くから知られていましたが，明確な形で遺跡の存在が確認されたのは，昭和42～43年のことであります。昭和42年に農地改善事業が行われ，遺物が出土しました。これを受けて昭和43年に，高岡工芸高校地理歴史クラブＯＢ会による発掘調査が実施されました。その結果当石塚遺跡が弥生時代中期の遺跡として注目されることになりました。

その後も，開発工事等に伴い，高岡市教育委員会による発掘調査が実施され，徐々にではありますが，当遺跡の内容が判明しつつあります。

本書は，個人住宅の建設に伴い平成５年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

この調査では，弥生時代中期と古墳時代前期の遺構が検出され，遺物が出土しました。弥生時代中期では方形周溝墓や玉作り工房址が確認されました。前者は平成４年度の調査例のものと共に，県下における唯一明確な弥生時代中期の方形周溝墓と言えるものです。後者の当遺跡における玉作りについては，これまで表面採取資料等で，弥生時代中期における玉作り遺跡の存在例として，論文等で多く取り上げられてきましたが，今回の調査により，県下における弥生時代中期の明確な玉作りの実態がより判明したと言えます。また，古墳時代前期については，竪穴住居址や掘立柱建物址が確認され，以前発掘調査したこの時期の古墳と同時期でもあり，この時代の集落跡の全体像に迫る一資料を得たと言えます。

終わりに，今回の調査において，御協力・御援助いただいた地元の皆様，関係各位に厚くお礼申しあげます。

平成７年３月31日

高岡市教育委員会
教育長　篠　島　　満

## 例　言

1．本書は，個人住宅建設に伴う石塚遺跡発掘調査の概要報告書である。

2．当調査は，平成５年度県単補助事業「市内遺跡試掘調査事業」として高岡市教育委員会が実施した。なお，調査内容は本調査である。

3．調査地区は，高岡市和田552-2である。

4．現地調査期間は，平成５年５月17日から同年７月９日までである。

5．報告書作成は，平成６年度の市単独事業として実施した。

6．調査関係者は，次のとおりである。

社会教育課長；野村一郎

課長補佐；鹿島誠一（平成５年度）

課長補佐；森　忠夫（平成６年度）

文化係長；大石　茂

係員；山口辰一

係員；榎木和代（平成５年度）

係員；根津明義（平成６年度）

7．本書における遺構記号は，次の通りである。

ＳＢ－建物址，ＳＤ－溝，ＳＫ－土坑，ＳＩ－竪穴住居址，ＳＺ－墳墓

ＳＸ－その他の遺構

8．本書の挿図における断面図のレベルの基準ラインは，標高11.2ｍを示している。

9．現地調査及び報告書作成において，以下の各氏より御教示を得た。

（順不同，敬称略）

小島俊彰（高岡市文化財保護審議委員）

西井龍儀（富山考古学会）

林寺厳洲（富山考古学会）

古川与志継（野洲町立歴史民俗資料館）

邑本順亮（高岡市文化財保護審議委員）

10．本書の執筆は，山口が担当した。

## 調査参加者名簿

**発掘**　大谷知可子，小林茂，杉本広政，専徒一夫，高倉鶴蔵，高田えみ子
高田富雄，田中あけみ，寺井久子，道谷美奈子，中川恵子，橋真理子
前田武國，牧野正子，三島幸代，水外一郎

**整理**　大谷知可子，小竹由紀子，尾山久美子，垣地慶子，曲本直美
新谷晴紀子，高田えみ子，寺井久子，土合良子，道谷美奈子
中田郁子，中村恭子，西野千鶴，橋真理子，三島幸代

**協力者**　荒井隆

# 目　　次

例　言
目　次

Ⅰ　序　　説 …… 1

Ⅱ　遺　　構 …… 3
1．工房址 …… 3
2．方形周溝墓 …… 5
3．竪穴住居址 …… 7
4．掘立柱建物址 …… 7
5．土坑 …… 7
6．溝 …… 8

Ⅲ　遺　　物 …… 10
1．土器 …… 10
2．土製品 …… 11
3．石製品 …… 11

Ⅳ　結　　語 …… 13

## 挿　図　目　次

第1図　調査地区位置図（1／5,000） …… 1
第2図　遺構図（1／200） …… 2
第3図　工房址ＳＸ07位置図（1／300） …… 3
第4図　工房址ＳＸ07土坑実測図（1／80） …… 4
第5図　工房址ＳＸ07遺物出土位置図（1／80） …… 4
第6図　方形周溝墓ＳＺ07実測図（1／80） …… 5
第7図　竪穴住居址ＳＩ01実測図（1／80） …… 6
第8図　掘立柱建物址ＳＢ01・02実測図（1／80） …… 6

# 図　面　目　次

図面１　遺物実測図　弥生土器
図面２　遺物実測図　弥生土器
図面３　遺物実測図　弥生土器
図面４　遺物実測図　土師器
図面５　遺物実測図　土製品・石製品
図面６　遺物実測図　石製品
図面７　遺物実測図　石製品
図面８　遺物実測図　石製品
図面９　遺物実測図　石製品
図面10　遺物実測図　石製品

# 図　版　目　次

巻首図版　１．調査地区全景（西）
２．工房址ＳＸ07遺物出土状態（南）
図版１　遺構　１．全景（北東）
２．全景（上方）
図版２　遺構　１．全景（北）
２．全景（南）
図版３　遺構　１．工房址ＳＸ07遺物出土状態（北西）
２．工房址ＳＸ07土坑遺物出土状態（北東）
図版４　遺構　１．工房址ＳＸ07土坑全景（南東）
２．工房址ＳＸ07土坑全景（南西）
図版５　遺構　１．工房址ＳＸ07ヒスイ出土状態（南西）
２．工房址ＳＸ07ヒスイ出土状態（北東）
３．工房址ＳＸ07ヒスイ出土状態（北西）
図版６　遺構　１．工房址ＳＸ07緑色凝灰岩出土状態（北西）
２．工房址ＳＸ07玉髄出土状態（北西）
３．工房址ＳＸ07土坑弥生土器出土状態（南東）
図版７　遺構　１．方形周溝墓ＳＺ07全景（北）
２．方形周溝墓ＳＺ07全景（西）
図版８　遺構　１．方形周溝墓ＳＺ07弥生土器出土状態（北西）
２．方形周溝墓ＳＺ07弥生土器出土状態（南西）
図版９　遺構　１．竪穴住居址ＳＩ01全景（北東）
２．竪穴住居址ＳＩ01全景（北西）
図版10　遺構　１．掘立柱建物址ＳＢ01・02確認状態全景（南西）
２．掘立柱建物址ＳＢ01・02確認状態全景（北西）
図版11　遺構　１．掘立柱建物址ＳＢ01・02掘上状態全景（南西）
２．掘立柱建物址ＳＢ01・02掘上状態全景（北西）
図版12　遺構　１．土坑ＳＫ88遺物出土状態（北東）
２．土坑ＳＫ97遺物出土状態（南）
図版13　遺物　弥生土器
図版14　遺物　１．弥生土器
２．弥生土器
図版15　遺物　１．土師器
２．土製品
図版16　遺物　石製品
図版17　遺物　石製品
図版18　遺物　石製品

# Ⅰ 序　説

**遺跡概観**

当「石塚遺跡」は，高岡市街地の南西郊，ＪＲ高岡駅の西南西約3.0kmに位置する。遺跡の東端部をＪＲ北陸本線が走っている。東側には和田川が西側には祖父川がそれぞれ北流している。この両河川に挟まれた標高11～12ｍの微高地に当遺跡が立地している。この付近は，県西部の大河，庄川の形成した扇状地の末端部に当たる。和田川，祖父川とも，扇状地特有の湧水を水源とする河川である。

遺跡の範囲は，南北600ｍ×東西470ｍを計る。最近実施した試掘調査や発掘調査の結果，従来想定していた範囲より拡大することが明確になり，現在このようなものと考えている。

**調査に至る経緯**

平成５年１月下旬，市農業委員会からの照会で，当遺跡における農地転用と個人住宅の建築計画を知った。遺構が検出されることが確実な地区であり，地主の高田小七郎氏との協議・承諾を得て，試掘調査を省略して直ちに本調査を実施することになった。本調査ではあるが，県単補助事業の「平成５年度市内遺跡試掘調査事業」の一部として実施することになった。

**第１図　調査地区位置図（１／5,000）**

**調査経過**

発掘調査は，平成５年５月17日から同年７月９日まで実施した。実働調査日数は20日である。表土の除去はバックフォーで行い，場内に積み上げた。その後，遺構の確認や掘り下げ，記録の作成を行った。調査対象面積は499㎡で，288㎡の発掘を実施した。

**検出遺構**

検出遺構は以下のとおりである。

工房址１基（ＳＸ07），方形周溝墓１基（ＳＺ07），竪穴住居址１軒（ＳＩ01）

掘立柱建物址２棟（ＳＢ01・02），土坑10基（ＳＫ88～97），溝10条（ＳＤ32～41）

**出土遺物**

出土遺物は以下のとおである。

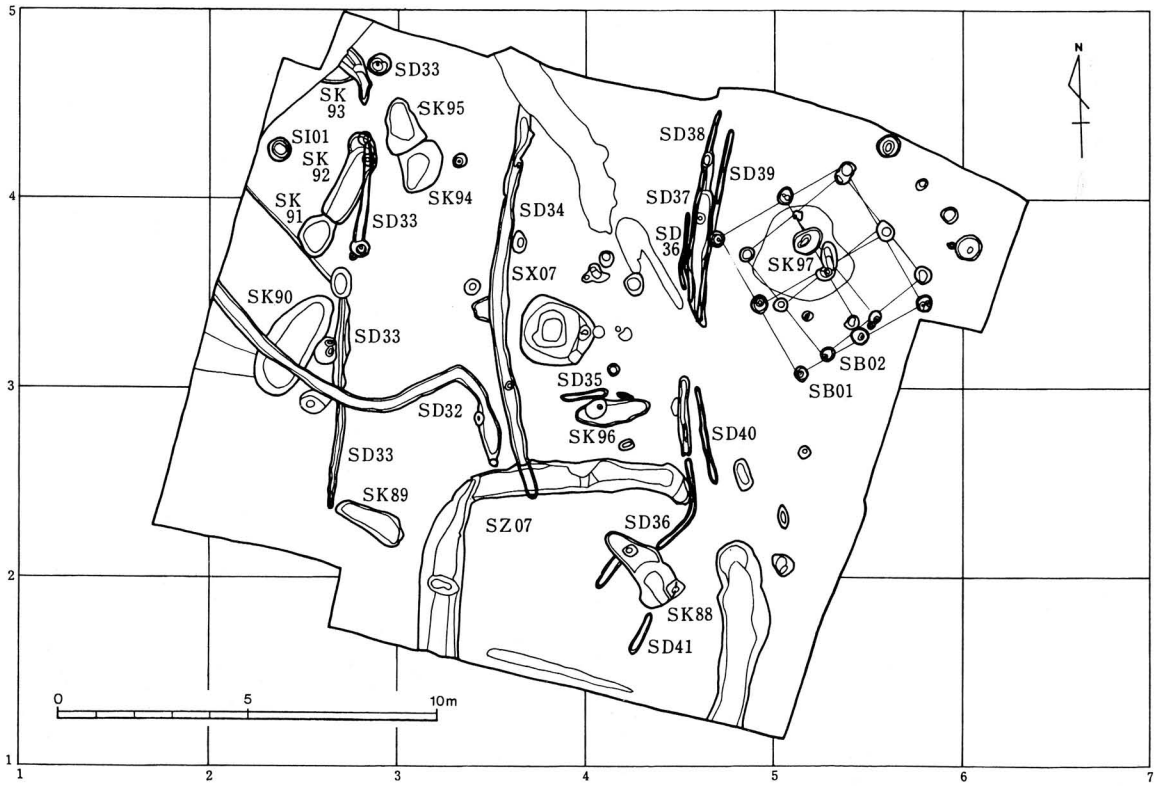
土器・陶磁器類；弥生土器，土師器，珠洲，越中瀬戸

土製品；土製紡錘車

石製品；①玉類の製品・未製品等，②玉類の製作にかかるもの，③磨製石斧，石鏃

**グリッド**

調査地区のグリッドは平面直角座標系に合わせた。Ｘ＝１，Ｙ＝１の地点は，原点より，西へ16.265km，北へ80.86kmの位置である。従来，グリッドや遺構図におけるメッシュの表示において，３ｍ四方の区画を単位としていたが，最近は５ｍや10ｍを単位として測量の基準杭を設置して，調査を実施し記録を作成しており，３ｍグリッドは形骸化しているものである。そこで，今回から遺構図におけるメッシュの表示を５ｍを単位とするものに改正した。




**第２図　遺構図（１／200）**

# Ⅱ 遺　構

## 1．工 房 址

### 工房址ＳＸ07

調査地区の中央部で検出された土坑とその周辺部を玉作りに関したものとし，工房址ＳＸ07とした。

この遺構付近は，基盤層の上に厚さ約10cmの灰色シルト層が見られた。これは弥生時代の遺物包含層である。この土層を少しづつ掘り下げ遺構等の確認作業を実施している時，ヒスイの未製品が出土したので，より注意して掘り拡げることにした。この付近の土層には焼土が含まれていると共に，炭化した木材も散在していた。弥生土器と共にさらにヒスイの加工片や剥片，玉髄の剥片等も出土した。このため，遺物の出土位置を記録し，これらの土壌を水洗するため持ち帰ることにし，土嚢袋に収納することにした。

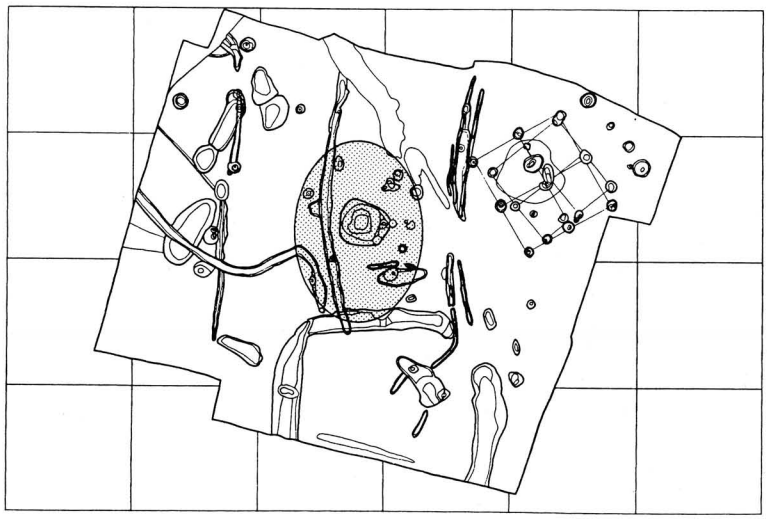
工房址ＳＸ07としたのは，一応南北約７ｍ×東西約５ｍの範囲である。第３図において「網」を掛けて示している。明確な遺構としては，土坑と，これに関するものの可能性がある，溝と小ピットである。土坑は平面形は不正円形で，規模は径1.80～2.00ｍ，深さ70cmである。覆土は上部のみ暗灰色シルト層であり，それ以外は灰色シルト層のである。炭化した木材はこの土坑及び北側一帯に散在していた。焼土も同様である。玉作り関係遺物としては次のようなものがある。安山岩石錐，玉髄石錐状剥片，結晶片岩擦切具，砂岩砥石，玢岩砥石，ヒスイの勾玉未製品・荒割品・剥片，緑色凝灰岩の管玉・未製品・型割品・剥片，玉髄荒割品・剥片。

出土遺物の主要なものは，第５図で出土位置を明示し，「図面１～10」で図示した以下のものである。

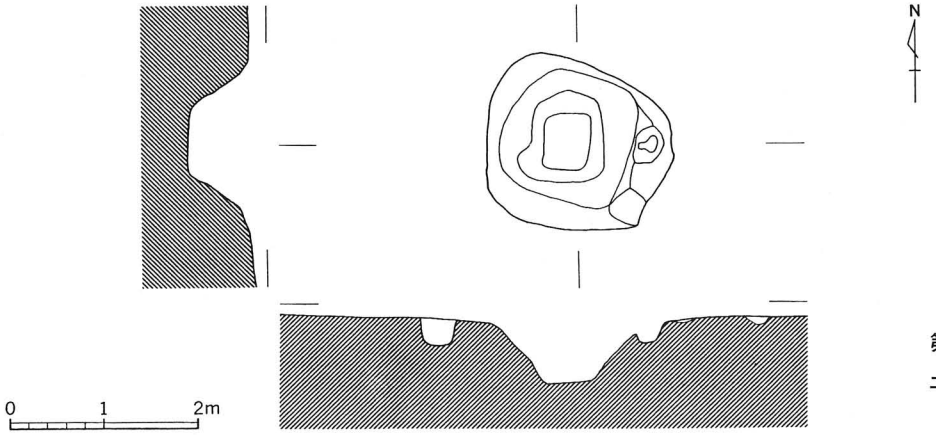
1．弥生土器；図面１－101.106.109.112，図面２－107，図面３－118

2．土製紡錘車；図面５－202.203（土坑の北側より出土した。明確な位置は記録していない。）

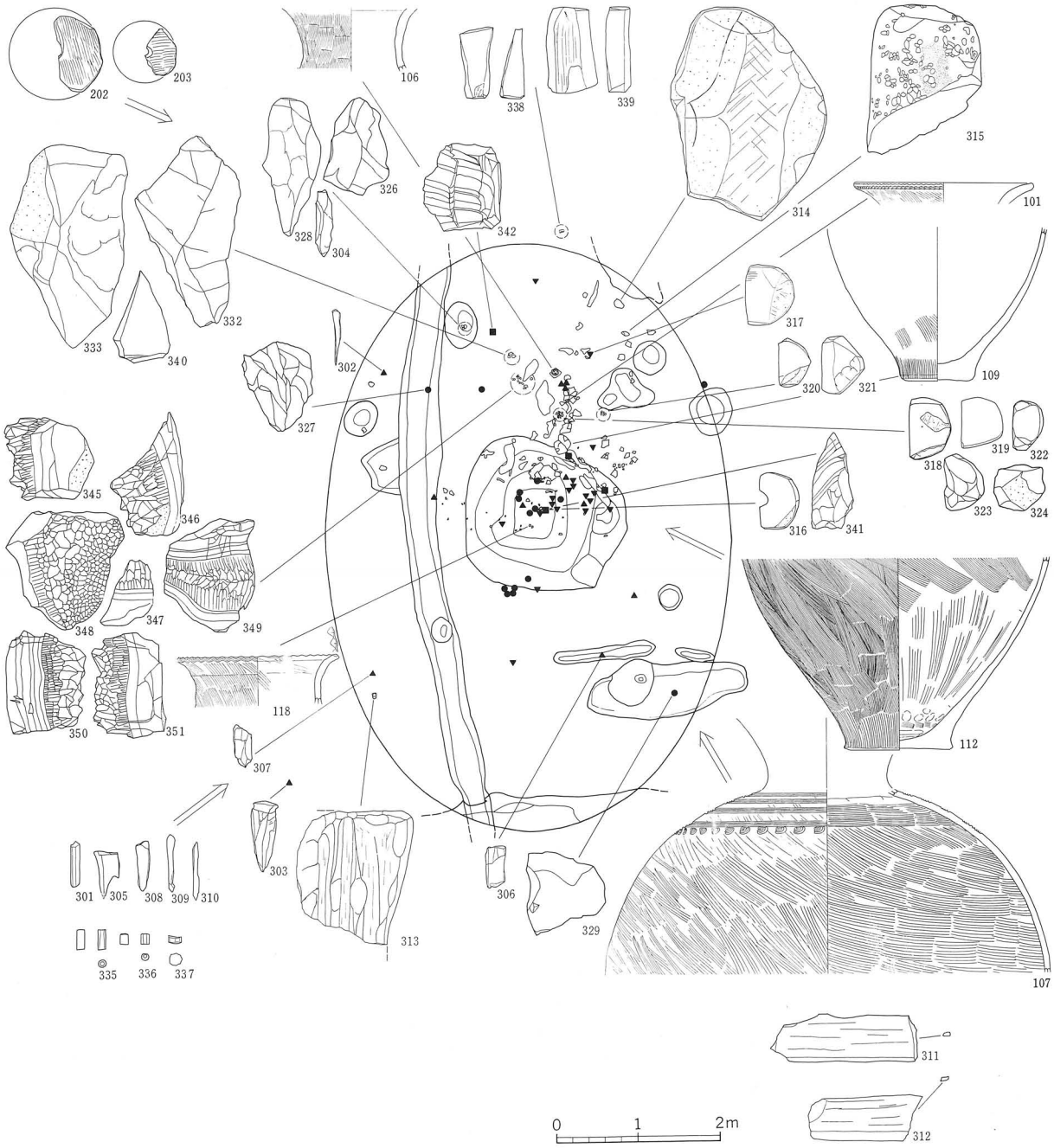
3．石製品関係遺物；図面５－301～312，図面６－313～315，図面７－316～324.326，図面８－328.332.333，図面９－335～341，図面10－345～351



**第３図　工房址ＳＸ07位置図**
**（１／300）**




第４図　工房址ＳＸ07
土坑実測図（１／80）



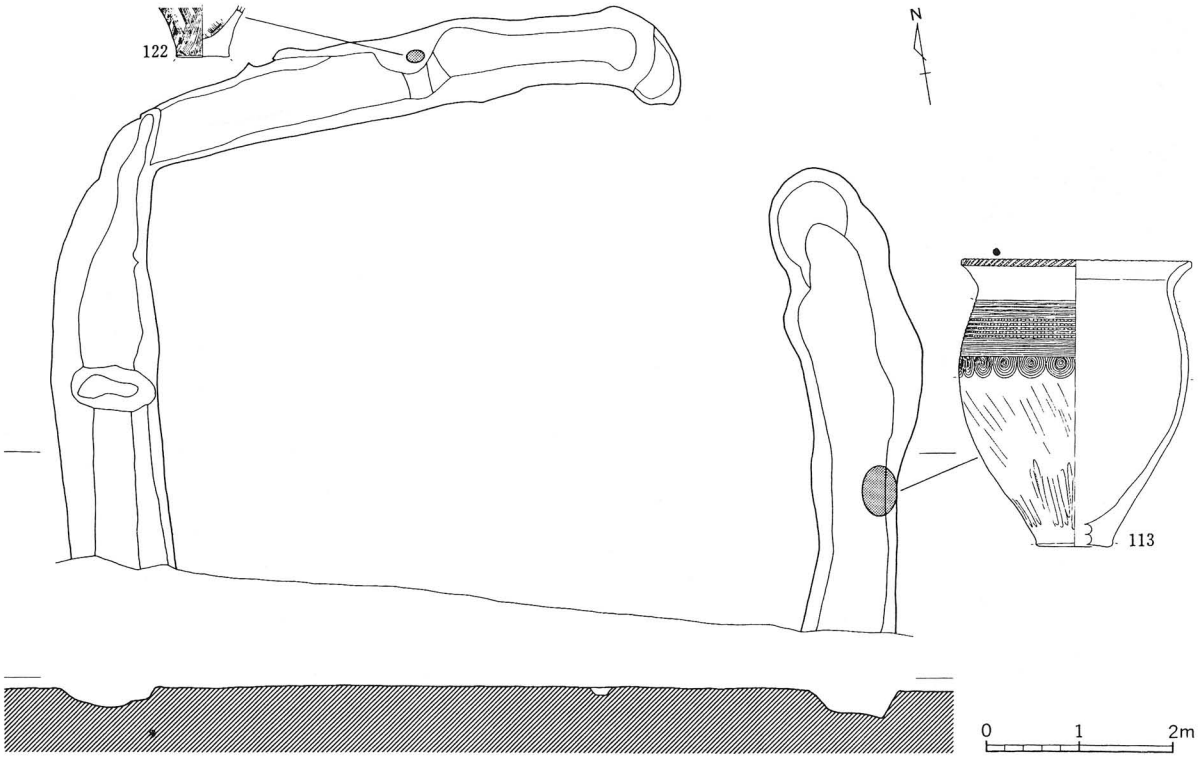
なお，303.306.307は，ＳＸ07関連遺物で，303.307はＳＤ32，306がＳＤ35の所属でもある。

遺物の出土位置を明示した第５図は，遺構を80分の１，遺物を図面１～10での縮尺図をさらに２分の１に縮めた大きさになっている。第５図の左下の安山岩石錐等の極小遺物は，土壌洗浄の結果取り出したもので，土坑からの出土である。また右下の結晶片岩擦切具は，ＳＺ07の周溝上面から出土している。また，第５図の記号は，●－ヒスイ，■－緑色凝灰岩，▲－玉髄，▼－サヌカイトの出土位置を示している。

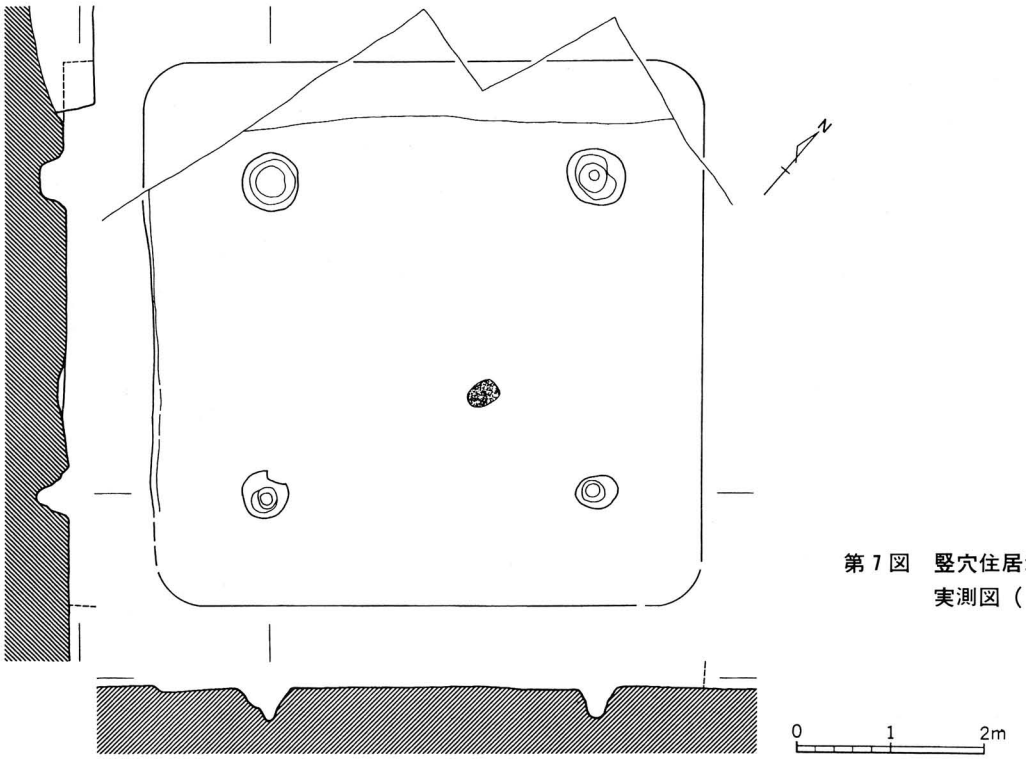
## ２．方形周溝墓

### 方形周溝墓ＳＺ07

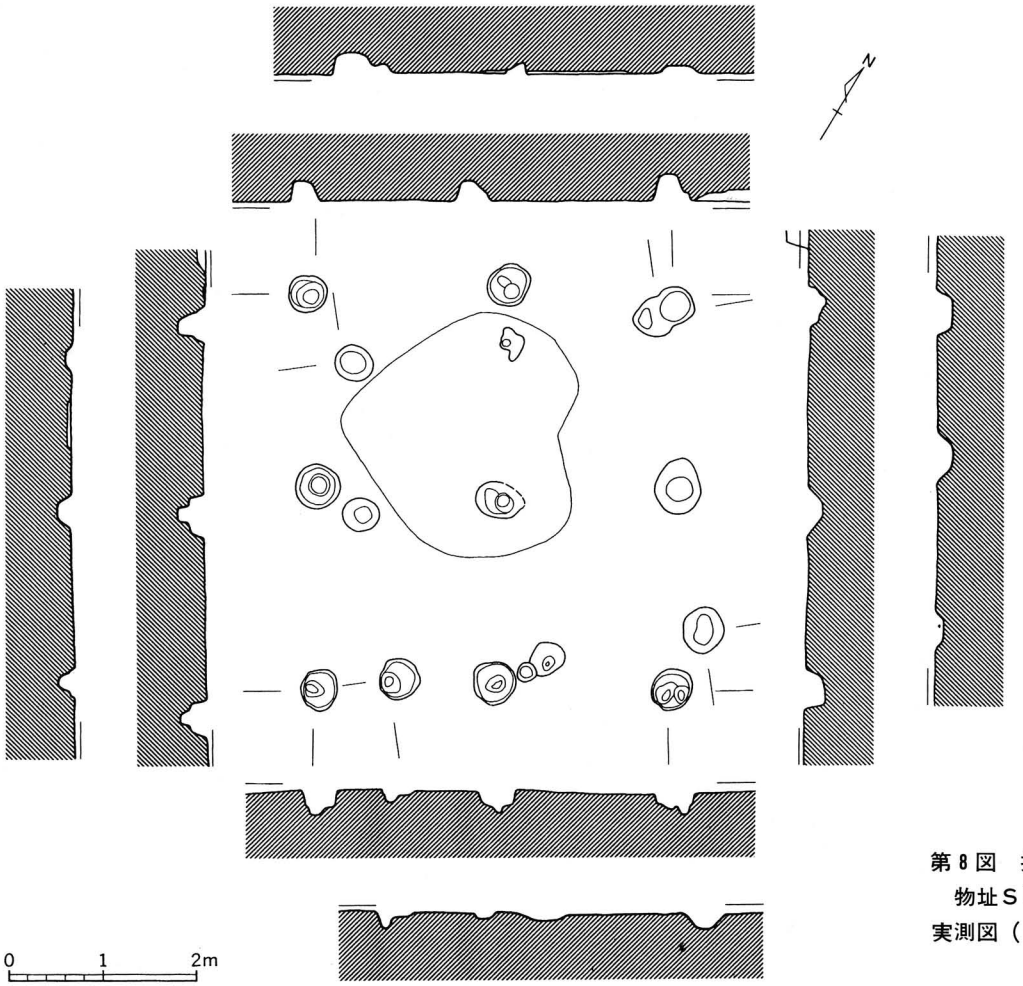
調査地区の中央南側で検出された方形周溝墓。南側は調査地区外になる。北側中央西寄りで，周溝の上部がＳＤ34に切られている。周溝の内側にＳＫ88，ＳＤ36・41が所在するが，当遺構と関係がないものと判断した。周溝は，上面幅57～130cm，底面幅23～73cm，深さ12～32cmを計る。墳丘の規模は，南北が上場で5.25ｍ以上，下場（溝の内側裾部）で5.45ｍ以上，周溝外端で6.05ｍ以上を計り，東西が上場で6.90ｍ，下場で7.30ｍ，周溝外端で9.30ｍを計る。周溝は北東側コーナー部で一旦切れている。また北西側コーナー部はやや浅くなる。周溝の埋土は，基本的に３層に分かれ，上から第１層；暗灰色シルト，第２層；灰色シルト，第３層；淡黄白色シルト（地山ブロック）となり，Ｕ字状の堆積を示していた。出土遺物は弥生土器である。図示した甕113と甕底部片122以外は小破片である。




第６図　方形周溝墓ＳＺ07実測図（１／80）




第７図　竪穴住居址ＳＩ01
実測図（１／80）




第８図　掘立柱建
物址ＳＢ01・02
実測図（１／80）

## 3．竪穴住居址

### 竪穴住居址ＳＩ01

調査地区の北西隅部で検出された竪穴住居址である。北西側は攪乱に切られている。北側と西側は調査地区外である。当住居の床面下からは，ＳＫ91～95，ＳＤ33が検出されている。

上部削平を受け，壁面は南西側で僅かに確認されたに過ぎないが，４つのピットの存在や中央部に炉址の名残と思える焼土を確認し，また一部ではあるが堅い土の面，いわゆる床面も確認したので，竪穴住居址とした。平面形は隅丸方形で，対角線上に４本の主柱穴を持つ竪穴住居址と判断している。想定規模は，北西～南東5.95ｍ×北東～南西6.05ｍである。壁高は南西側で８cm，周溝は確認されていない。主軸は北東～南西として，Ｎ－50度－Ｅである。主柱穴の規模は次のとおりである。①北側主柱穴；径60～65cm，深さ33cm，②東側主柱穴；径35～45cm，深さ36cm，③南側主柱穴；径47～50cm，深さ36cm，④西側主柱穴；径62cm，深さ31cm。

## 4．掘立柱建物址

### 掘立柱建物址ＳＢ01

調査地区の北東隅部で検出された。北西～南東棟の総柱の掘立柱建物址である。建物の規模は，桁行２間（4.20ｍ）×梁行２間（3.80ｍ）である。棟の方向は，Ｎ－30度－Ｗを示す。柱間寸法は，桁行2.10ｍ等間，梁行1.90ｍ等間。掘り方は略円形で，規模は径38～58cm，深さ18～35cmである。全体的にＳＢ02と重複している。ＳＫ97も当建物内に位置している。西側掘り方（北西側梁行西端部）はＳＤ39を切っている。出土遺物は弥生土器の小破片である。

### 掘立柱建物址ＳＢ02

調査地区の北東隅部で検出された。桁行と梁行が等しい総柱の掘立柱建物址である。建物の規模は，桁行２間（3.40ｍ）×梁行２間（3.40ｍ）である。棟の方向は，北西～南東棟としてＮ－40度－Ｗを示す。柱間寸法は1.70ｍ等間である。掘り方は略円形で，規模は径38～58cm，深さ９～21cmである。全体的にＳＢ01と重複している。ＳＫ97も当建物内に位置している。出土遺物は弥生土器の小破片である。

## 5．土　　坑

### 土坑ＳＫ88

調査地区の南東側，ＳＺ07の周溝の内側で検出された。平面形は不正楕円形を呈し，規模は，長軸2.45ｍ，短軸0.90ｍ，深さ21cmを計る。ピットに２箇所切られている。ＳＤ36を切っている。出土遺物は，弥生土器，土製紡錘車１点（201），緑色凝灰岩管玉１点（334）である。図示した弥生土器は，102.121である。

### 土坑ＳＫ89

調査地区の南西側で検出された。平面形は楕円形で，規模は，長軸2.00ｍ，短軸0.75ｍ，深さ15cmである。出土遺物は弥生土器である。

**土坑ＳＫ90**

調査地区の西側中央部で検出された。平面形は楕円形で，規模は，長軸3.05ｍ，短軸1.50ｍ，深さ21cmを計る。南西側を攪乱，南側をＳＤ32に，東側をピットに切られている。出土遺物は弥生土器である。図示したものは，108.120.123である。

**土坑ＳＫ91**

調査地区の西側中央部で検出された。平面形は略円形で，規模は，長軸1.10ｍ，短軸0.95ｍ，深さ19cmである。ＳＩ01の床下から検出され，北側はＳＫ92と接している。出土遺物は弥生土器である。

**土坑ＳＫ92**

調査地区の北西側で検出された。平面形は楕円形で，規模は，長軸2.45ｍ，短軸0.75ｍ，深さ13cmである。ＳＩ01の床下から検出され，北東側を，ＳＤ33，ピットに切られている。出土遺物は弥生土器，ヒスイ荒割品１点（330）である。図示した弥生土器は，115である。

**土坑ＳＫ93**

調査地区の北西隅部で検出された。平面形は楕円形と想定されるが，一部のみの検出である。深さは６cmである。ＳＩ01の床下から検出され，北東側をＳＤ33に，北西側を攪乱に切られている。出土遺物は弥生土器である。

**土坑ＳＫ94**

調査地区の北西側で検出された。平面形は不正楕円形で，規模は，長軸1.55ｍ，短軸1.15ｍ，深さ14cmである。ＳＩ01の床下から検出され，北西側はＳＫ95と接している。出土遺物は弥生土器である。

**土坑ＳＫ95**

調査地区の北西側で検出された。平面形は不正楕円形で，規模は，長軸1.35ｍ，短軸0.95ｍ，深さ22cmである。ＳＩ01の床下から検出され，南東側はＳＫ94と接している。出土遺物は弥生土器で，図示したものは，103.119である。

**土坑ＳＫ96**

調査地区の中央で検出された。工房址としているＳＸ07の南側，ＳＺ07の北側である。平面形は楕円形で，規模は，長軸2.00ｍ，短軸0.65ｍ，深さ10cmである。ピットに切られている。出土遺物は弥生土器，ヒスイ荒割品１点（329）である。

**土坑ＳＫ97**

調査地区の北東部，ＳＢ01・02の内方で検出された。平面形は略円形で，規模は，長軸0.85ｍ，短軸0.70ｍ，深さ20cmである。上部は攪乱に切られている。出土遺物は弥生土器で，図示した111.114である。

## ６．溝

**溝ＳＤ32**

調査地区の西側中央部で検出された東西に走る溝である。湾曲した後，Ｌ字状に折れ曲がる。規模は，長さ約10ｍ，幅25～50cm，深さ14cmである。西側は調査地区外となる。ピットに３箇所切られている。ＳＫ90，ＳＤ33を切っている。出土遺物は，土器類では弥生土器，土師器である。弥生土器は小破片のみで，まとまったものとしては土師器である。図面４で図示した土師器の内，小破片の124以外の125～129は当遺構から

の出土である。土器類以外では，玉髄石錐状剥片の303.30と緑色凝灰岩剥片342が出土している。

**溝ＳＤ33**

調査地区の西側を南北に走る溝である。２箇所で一旦途切れるが１つの遺構とした。直線的に延びた後，北側でやや湾曲する。規模は，長さ30.5ｍ，深さ15cmである，幅は北側でやや広くなり60cmであるが，その他の所は20～30cmである。ＳＩ01の床下から検出され，この竪穴住居址の南側主柱穴に切られている。またその他のピットにも切られている。北側は攪乱に切られて終わっている。南側はＳＤ32に切られている。ＳＫ92・93を切っている。出土遺物は弥生土器である。

**溝ＳＤ34**

調査地区の中央西寄りを南北に走る溝である。やや湾曲している。規模は，長さ10.5ｍ，幅25～50cm，深さ15cmである。北側は攪乱に切られて終わっている。南端部はＳＺ07の周溝上部を切っている。出土遺物は弥生土器とヒスイ荒割品１点（327）である。

**溝ＳＤ35**

調査地区の中央部を東西に走る溝である。ＳＫ96の北側に沿うように位置している。一旦途切れるが１つの遺構とした。規模は，長さ２ｍ，幅15～20cm，深さ６cmである。出土遺物は弥生土器の小破片と玉髄石錐状剥片１点（306）である。

**溝ＳＤ36**

調査地区の中央東寄りを南北に走る溝である。直線的に延びた後，南側で逆く字状に緩く折れ曲がる。３箇所で途切れるが１つの遺構とした。規模は，長さ（途切れている部分を含む）約11ｍ，幅７～30cm，深さ15cmである。この遺構の南側はＳＺ07の周溝とほぼ接し，ＳＺ07の周溝内に入った後，ＳＫ88に一部切られる。出土遺物は弥生土器である。

**溝ＳＤ37**

調査地区の中央北東寄りを南北に走る溝である。規模は，長さ4.7ｍ，幅35～60cm，深さ11cmである。当溝の北側から西側上部はＳＤ38に切られている。東側上部はＳＤ39に切られている。またピットに２箇所切られている。出土遺物は弥生土器で，図示したものは110である。

**溝ＳＤ38**

調査地区の中央北東寄りを南北に走る溝である。規模は，長さ5.2ｍ，幅12～18cm，深さ10cmである。ピットに切られている。ＳＤ37を切っている。出土遺物は，弥生土器とヒスイ荒割品１点（325）である。図示した弥生土器は117である。

**溝ＳＤ39**

調査地区の中央北東寄りを南北に走る溝である。規模は，長さ5.2ｍ，幅10～12cm，深さ４cmである。中央部を，ＳＢ01の西側掘り方（北西側梁行西端部）に切られてる。ＳＤ37を切っている。出土遺物は，弥生土器の小破片である。

**溝ＳＤ40**

調査地区の中央東寄りを南北に走る溝である。規模は，長さ2.6ｍ，幅12～15cm，深さ６cmである。ＳＤ38ないしＳＤ39に繋がる可能性がある遺構である。出土遺物は弥生土器の小破片である。

**溝ＳＤ41**

調査地区の中央東寄りを南北に走る溝である。ＳＺ07の周溝内に位置している。規模は，長さ1.2ｍ，幅12～23cm，深さ７cmである。出土遺物は弥生土器の小破片である。

# Ⅲ 遺　物

## 1．土　器

**弥生土器**（図面１～３）

**壺口縁部Ａ**　101～103。外上方へ開く口縁部で，口端部には櫛描刻み目文が付く。口径は16.0～17.8cmを計る。

**壺口縁部Ｂ**　104。口縁部が受け口状に直立するものである。口縁部外面には羽状の櫛描刻み目文が付く。頸部は内外面とも刷毛目である。口径は24.5cmを計る。

**壺口縁部Ｃ**　105。口縁部がほぼ直立し，外面が折り返されたように肥厚する。

**壺頸胴上部**　106～108。106は外上方へ開く口縁部に繋がる頸部と推定される。外面は刷毛目による調整であるが，内面は剥離していて不明である。107は肩部に４条の櫛描直線文と１条の櫛描扇形文が付く。胴部最大径が41cmを計る大型の壺である。口縁部は外上方へ開くように復元して図示したが，不明である。調整手法は内外面とも刷毛目である。108は頸・肩部片である。肩部に上から，２条の櫛描直線文，１条の櫛描波状文，１条の櫛描直線文が付く。

**壺底部**　109～112。壺の胴下・底部片である。外面の調整は，109.110は刷毛目の後，ナデや磨き等で平滑にされている。111.112は刷毛目のままである。111は分厚い底部をもつ。112は，残存部の胴部最大径が28.2cmを計る大型品である。

**甕Ａ**　113。口縁部がく字状に緩く外反する。胴部最大径は胴中央部よりやや上にきて，口縁部とほぼ同じ径を示す。口端部には櫛描刻み目文がつく。胴上部に上から，櫛描直線文，櫛描簾状文，櫛描直線文，櫛描同心円文が付く。胴中央・下部外面は，磨滅していて明確ではないが，やや磨きが加えられている。法量は，口径18.0，胴部最大径18.5，器高23.0，底径5.9cmを計る。

**甕Ｂ**　114。口縁部がく字状に緩く外反する。胴部最大径は胴中央部よりやや上にきて口縁部径より大きくなる。口端部には櫛描刻み目文がつく。底部は欠損している。口端部以外の口縁部も含め，全体的に刷毛目調整されている。胴部に文様は付かない。法量は，口径21.6，胴部最大径23.6，残存器高23.3cmを計る。

甕口縁部Ａ115.116。口端部が単純なものである。口縁部の形態は緩く外反する115と大きく外方に開く116であり，違っている。

**甕口縁部Ｂ**　117。口端部に櫛描刻み目文がつくものである。口縁部は外反して外上方へ拡がり，やや肥厚する。

**甕口縁部Ｃ**　118～119。口端部が波状になるものである。

**甕底部**　120～123。甕の底部片である。外面の調整は刷毛目である。123は刷毛目が確認できないが，これは磨滅しているためであり，本来刷毛目調整と推定される。

**土師器**（図面４）

**壺Ａ**　124。小型丸底壺の口縁部と推定した破片である。内面はヘラ磨きされている。外面はヘラ磨き，及びヘラ削りである。

**壺Ｂ**　125.126。大型の壺の口縁部と胴下・底部片である。同一個体である可能性が強い。125は複合口縁の口縁部片である。口縁部は外面に稜をなした後，やや外反して外上方へ拡がる。口縁部は横ナデと推定さ

れるが，やや磨滅しており，明確ではない。頸部外面に刷毛目が確認できる。口径は19.7cmである。126は内面が刷毛目，外面が刷毛目の後，ヘラ磨きである。底部は下方へやや突出する形態となる。残存部の胴部部最大径は25.2cmを計る。

**甕A**　127.128。「布留甕」である。全体の形態が判明する127と口縁・胴上部片である128である。127は，口縁部径16.5，器高25.2，胴部最大径22.0cmを計る。形態は丸みのある倒卵形の胴部にやや内弯する口縁部が付く。口端部は内下方に肥厚し，上端部はナデによる弱い凹線となる。口縁部は横ナデ，胴部内面は，上・中央部がヘラ削り，下部から底部は指圧・ナデで，一部にヘラ削りされている。胴部外面は全体的に刷毛目である。胴上部は刷毛目の上に横ナデもみられる。128は127と類似している。口縁・胴上部のみ残存している。

**甕B**　129。口縁部がく字状に折れる甕の口縁・胴上部片である。甕Aに比べると器壁がややぶ厚い。口径は17.0cmを計る。

## 2．土 製 品

**土製紡錘車**（図面５）

弥生土器片再利用の紡錘車で，201～203の３点である。201は内面外面双方から穿孔したものが，ずれて貫通せず，再度穿孔したものと思われる。いずれも完存品ではなく，３分の１から２分の１程度しか残存していない。復元したそれぞれの径は，201が4.4cm，202が5.6cm，203が3.7cmである。

## 3．石 製 品

**石錐**（図面５）

安山岩の石錐で，図面５で２倍に拡大して図示した301である。研磨され多角柱状の形態となっている。径約１mmで長さ７mm残存している。

**石錐状剥片**（図面５）

玉髄の剥片で，スポール錐になる可能性もあると考えて図示した。302～310の９点で，302のみ極小のため２倍に拡大して図示した。その他のものは実大である。302が長さ0.85cm，303～310が長さ1.2～2.2cmである。

**擦切具**（図面５）

結晶片岩の擦切具で311.312の２点で，いずれも完存品ではない。いわゆる「石鋸」である。311は，長さ4.5cm，幅1.4cm，厚さ２mmである。刃部以外の縁片部は欠損面である。312は，長さ3.6cm，幅1.3cm厚さ３mmである。上下の縁片部と片方の端縁部は残存面である。主要な刃部は図面の下方であるが，上縁部も研磨されており，何らかの形で使用されたことが伺える。

**砥石**（図面６）

313は筋砥石や玉砥石と呼ばれているもので，砂岩である。長側面は，１面が欠損面となっている。他の３面はすべて使用面である。端部は片方が残存しており，一部使用されている。長さ8.2cm，幅7.1cm，厚さ

5.4cmである。314は玢岩の自然礫の一部に擦痕が付く。一応砥石として扱った。

**磨製石斧**（図面６）

太型蛤刃石斧の頭部片の315である。石材は安山岩である。長さ9.0cm，幅7.0cm，厚さ4.5cmである。

**ヒスイ勾玉未製品**（図面７）

ヒスイ勾玉未製品で，316～323の８点である。半円形を示す。個々には以下のとおりである。

316；長さ1.70cm，幅1.20cm，厚さ0.80cm。抉りが入っている。

317；長さ1.85cm，幅1.50cm，厚さ1.10cm。透明度の高いものである。

318；長さ1.90cm，幅1.30cm，厚さ0.80cm。

319；長さ1.60cm，幅1.25cm，厚さ0.80cm。

320；長さ1.50cm，幅1.00cm，厚さ0.80cm。

321；長さ1.75cm，幅1.35cm，厚さ0.80cm。隅丸三角形の形状である。

322；長さ1.55cm，幅1.00cm，厚さ0.70cm。

323；長さ1.65cm，幅1.20cm，厚さ0.95cm。分厚く，未製品とまでは言えない段階かもしれない。

**ヒスイ荒割品**（図面７・８）

ヒスイの荒割品で，図面７－324～327と図面８－328～333の計10点である。

**緑色凝灰岩管玉**（図面９）

太型管玉の334と細型管玉の335.336である。前者は淡緑色，後者は濃緑色である。334は，径6.5mm，長さ2.75cm，孔径２mmで，穿孔は両側より行われている。335は，径2.5mm，長さ６mm，孔径１mmである。336は，径2.5mm，長さ３mm，孔径１mmである。

**緑色凝灰岩管玉未製品**（図面９）

２倍に拡大して図示した337である。濃緑色である。研磨して多角柱としているもので，ほぼ８角柱を示す。径約２mmで，長さ１mm残存している。

**緑色凝灰岩形割品**（図面９）

338～340の３点で接合資料でもある。338と339は重なった状態で出土している。

338；濃緑色を呈する。長さ1.95～2.2cm，幅0.7～1.0cm，厚さ６～1.05mm。長側面の１面と端面の１面（図面の下側）が研磨されている。研磨されていない方の端面には，擦切り溝が付く。

339；濃緑色を呈する。長さ2.6cm，幅1.1～1.5cm，厚さ７mm。大きい方の端面（図面の下側）にＬ字状の擦切り溝が付く。

340；濃緑色を呈する。長さ2.85cm，幅2.0cm，厚さ1.1cm。

**緑色凝灰岩剝片**（図面９）

濃緑色の緑色凝灰岩の剝片で，341.342の２点である。

**鉄石英剝片**（図面９）

鉄石英の剝片で，343.344の２点である。

**玉髄荒割品**（図面10）

玉髄の荒割品で，345～349の５点は接合する。また350と351も接合する。それぞれ石英の結晶部分が付いている。

# Ⅳ 結　語

**弥生時代中期の遺構と遺物**

出土遺物のほとんどは弥生時代中期のものであり，後述する古墳時代前期の遺構以外はすべて弥生時代中期のものである。弥生時代中期の遺構は，工房址１基（ＳＸ07），方形周溝墓１基（ＳＺ07），土坑９基（ＳＫ89～97），溝９条（ＳＤ33～41）である。

工房址ＳＸ07は玉作りの工房址としたものである。弥生時代～古墳時代の玉作りの工房址としては，一般に竪穴住居址を当てられており，竪穴住居址内で玉作りが行われたイメージがある。ＳＸ07を工房址としたのは玉作り関係遺物が出土したからではあるが，竪穴住居址以外でも，玉作りが行われていた可能性を考えたからである。すなわち，住居址外の野外や遺構としては明確なものを残さない簡単な施設（簡単な覆屋）での玉作りを想定してのことである。中心施設とも言うべき土坑については，井戸である可能性を指摘しておきたい。石塚遺跡の調査では，弥生時代の井戸址は検出していない。検出したのは平安時代のものと中世のものである。これらの例や周囲の状況等を勘案するに，ＳＸ07の土坑程度で地下水を得ることが可能だからである。

方形周溝墓ＳＺ07は，北東隅部で溝が途切れるものである。また，南側は調査地区外となり，全体が判明していない。周溝内に土坑ＳＫ88が存在するが，これは古墳時代前期のものと考え，この方形周溝墓の主体部とはしなかった。石塚遺跡で方形周溝墓が検出されたのは，平成４年度調査にかかる「森田地区」で３基検出されたのに続き２例目である。

土坑は，10基検出された土坑の内，ＳＫ88以外の９基のものは弥生時代中期のものである。

これら弥生時代中期の遺構の先後については，方形周溝墓や土坑が古く，その後に玉作り関係の施設が設けられたものと考えている。

**古墳時代前期の遺構・遺物**

古墳時代前期の遺構としたものは次のものである。竪穴住居址１軒（ＳＩ01），掘立柱建物址２棟（ＳＢ01・02），土坑１基（ＳＫ88），溝１条（ＳＤ32）である。これらをこの時期に比定したのは次の理由による。

1．ＳＤ32から，古墳時代前期の土器が出土している。

2．各遺構の主軸が共通している。すなわち東西南北軸にたいして約45度の傾きをもって設置されている。この点，弥生時代中期とした遺構は，主軸が東西南北を基調とするものである。

3．弥生時代中期とした遺構との新旧関係から，古墳時代前期の遺構として矛盾しない。

4．覆土（埋土）が共通している。弥生時代中期とした遺構が灰色土が中心となるのに対して，黒褐色土のものである。

5．ＳＫ88出土の管玉は，完成品である点と軟質な石材である点で，弥生時代中期のものに似つかわしくないものであり，古墳時代前期とした方が蓋然性が高い。

石塚遺跡の古墳時代前期の遺構としては，昭和61・62年度及び平成３年度の調査で検出された古墳（前方後方墳と方墳）がある。今回の調査地区より，北側約250ｍの地点である。この墓域に対して居住域が検出されたとも言える。

**参考文献**


置田　雅昭　1987　「装身具－石製玉作り」『弥生文化の研究』8　雄山閣出版

河村　好光　1976　「古墳社会成立期における玉生産の展開－北陸玉生産の歴史的展開」『考古学研究』第23巻第3号　考古学研究会

河村　好光　1986　「玉生産の展開と流通」『岩波講座日本考古学』3　岩波書店

齊藤基生他　1979　『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書－下谷地遺跡』　新潟県教育委員会

佐藤　宗男　1970　「大中湖南遺跡における玉作について」『古代文化』第22巻第1号　古代学協会

木下　尚子　1987　「装身具－垂飾」『弥生文化の研究』8　雄山閣出版

木下　尚子　1987　「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古と歴史』中　同朋社出版

寺村　光晴　1981　「玉」『3世紀の考古学』　学生社

寺村　光晴　1990　「タマの道－タマからみた弥生時代の日本海」『海と列島文化』1　小学館

中原　義史　1994　『北陸の玉－古代のアクセサリー』　福井県立博物館

藤田富士夫　1989　『玉』(考古学ライブラリー52)　ニューサイエンス社

藤田富士夫　1992　『玉とヒスイ』　同朋社

森　浩一編　1988　『シンポジウム古代翡翠文化の謎』　新人物往来社

森　浩一編　1990　『シンポジウム古代翡翠道の謎』　新人物往来社

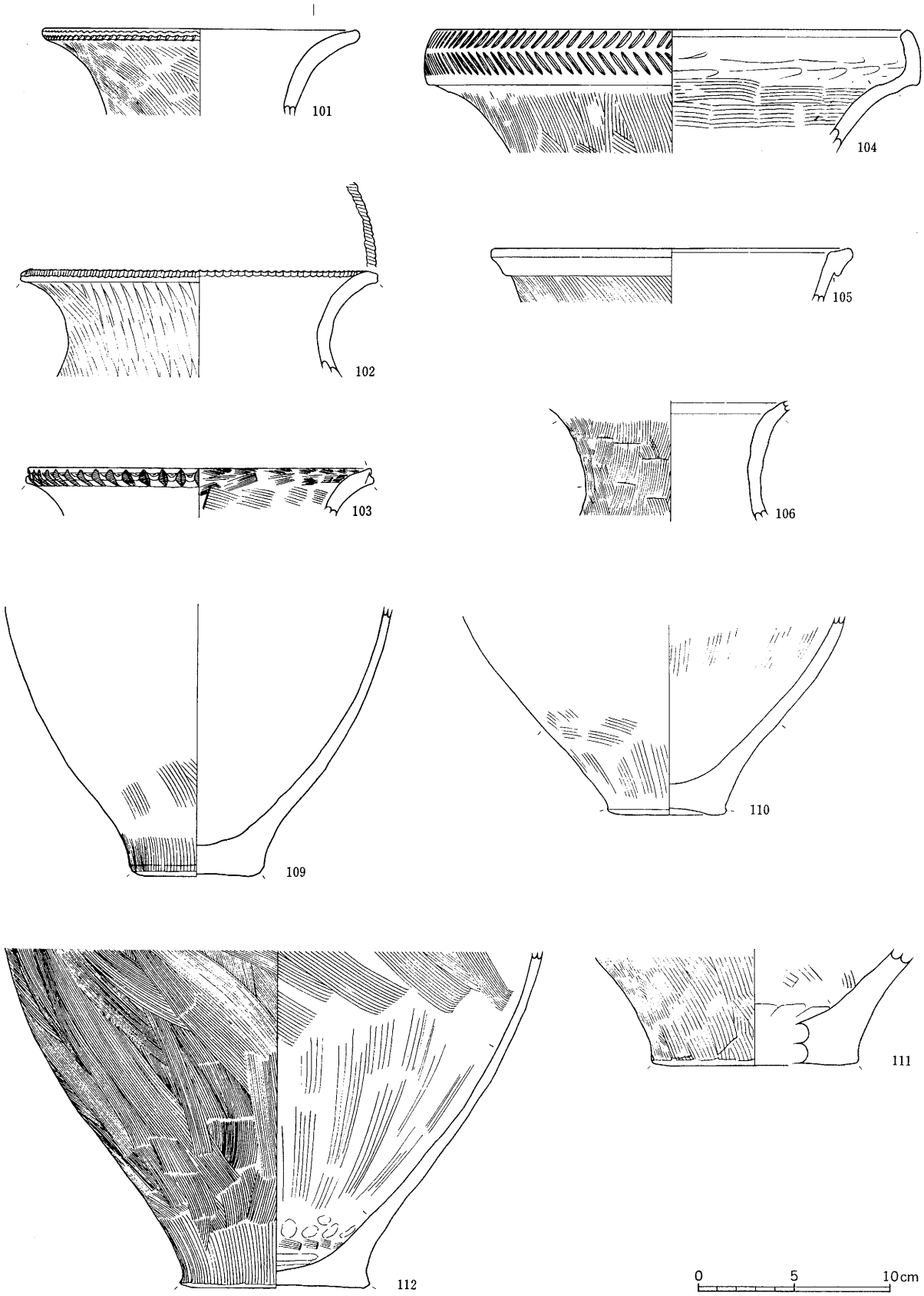
森　浩一編　1991　『古代王権と玉の謎』　新人物往来社

森　貞次郎　1980　「弥生勾玉考」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』　鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会

富山県埋蔵文化財センター　1987　『ひすい－地中からのメッセージ』

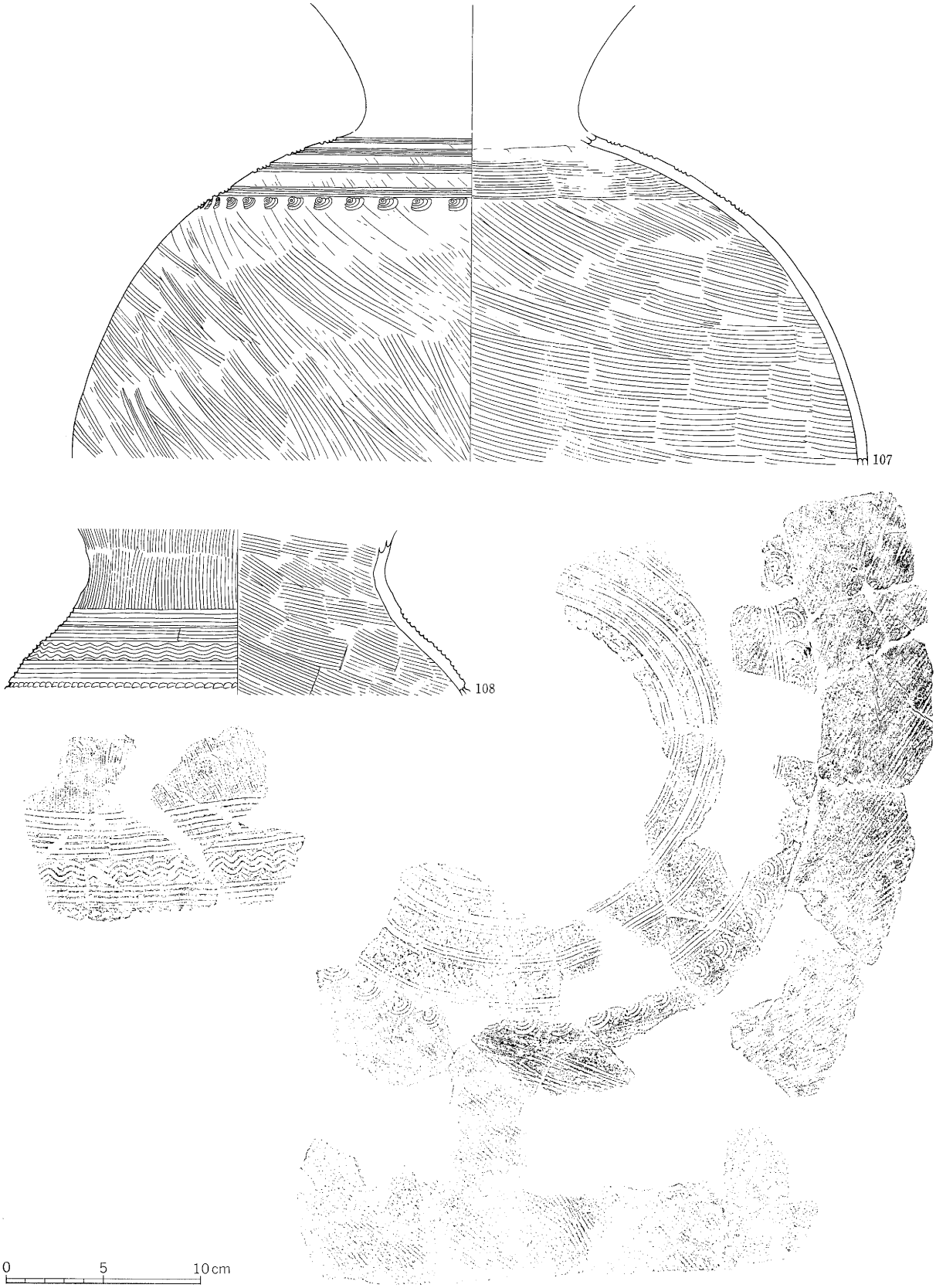
野洲町立歴史民俗資料館　1991　『古代の玉と玉作り－市三宅東遺跡と近江の玉作り－』

# 図面・図版



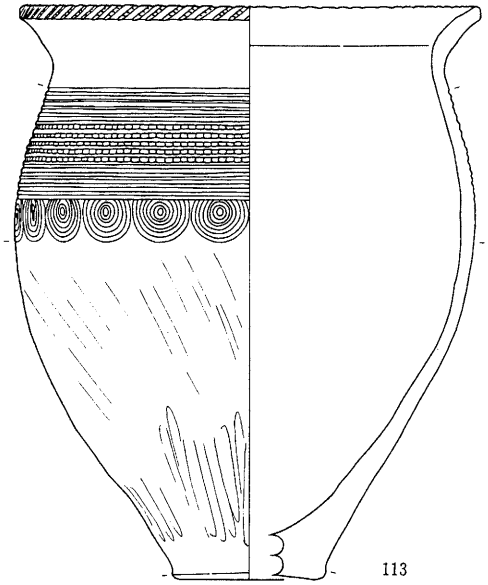

弥生土器

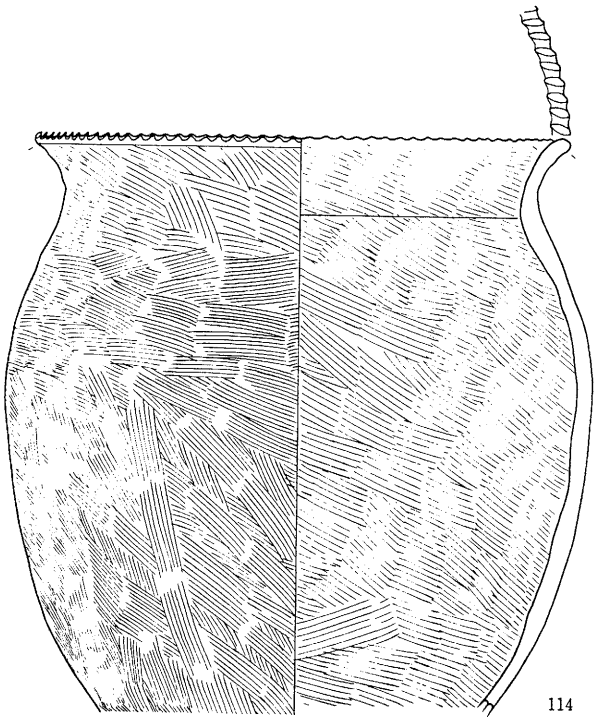
縮尺 1／3

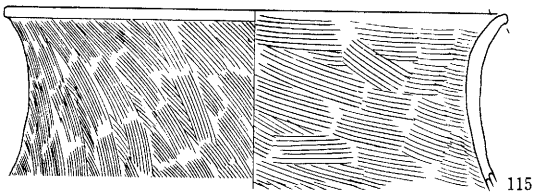


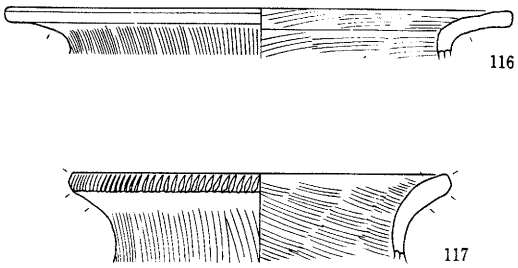

弥生土器

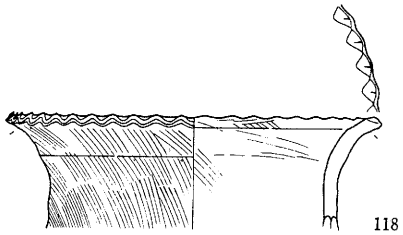
縮尺１／３

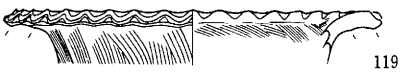


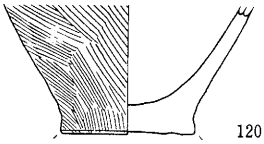



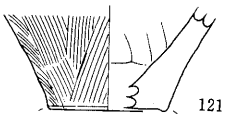



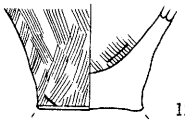



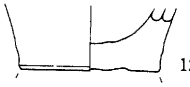



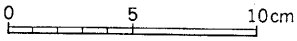



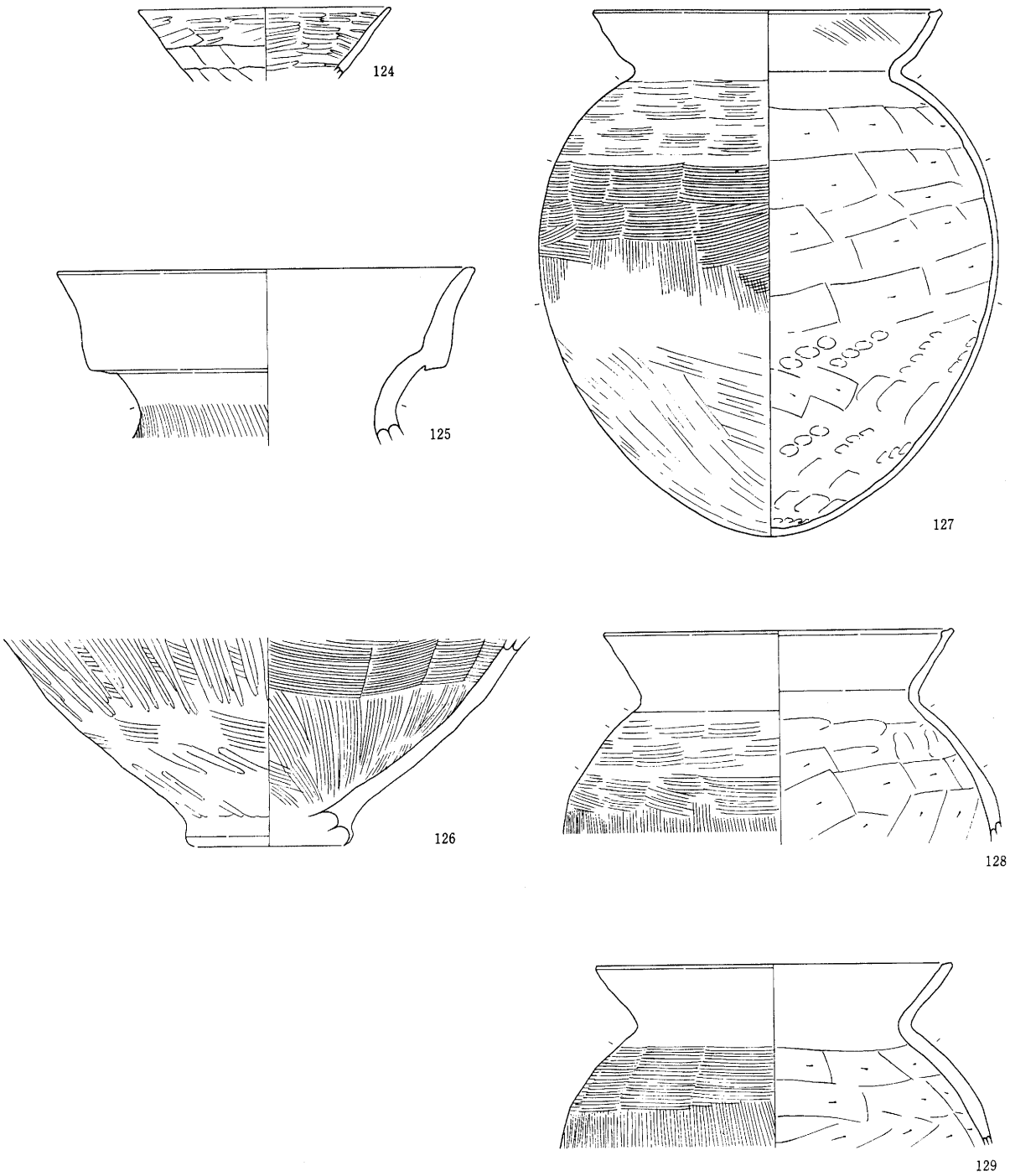



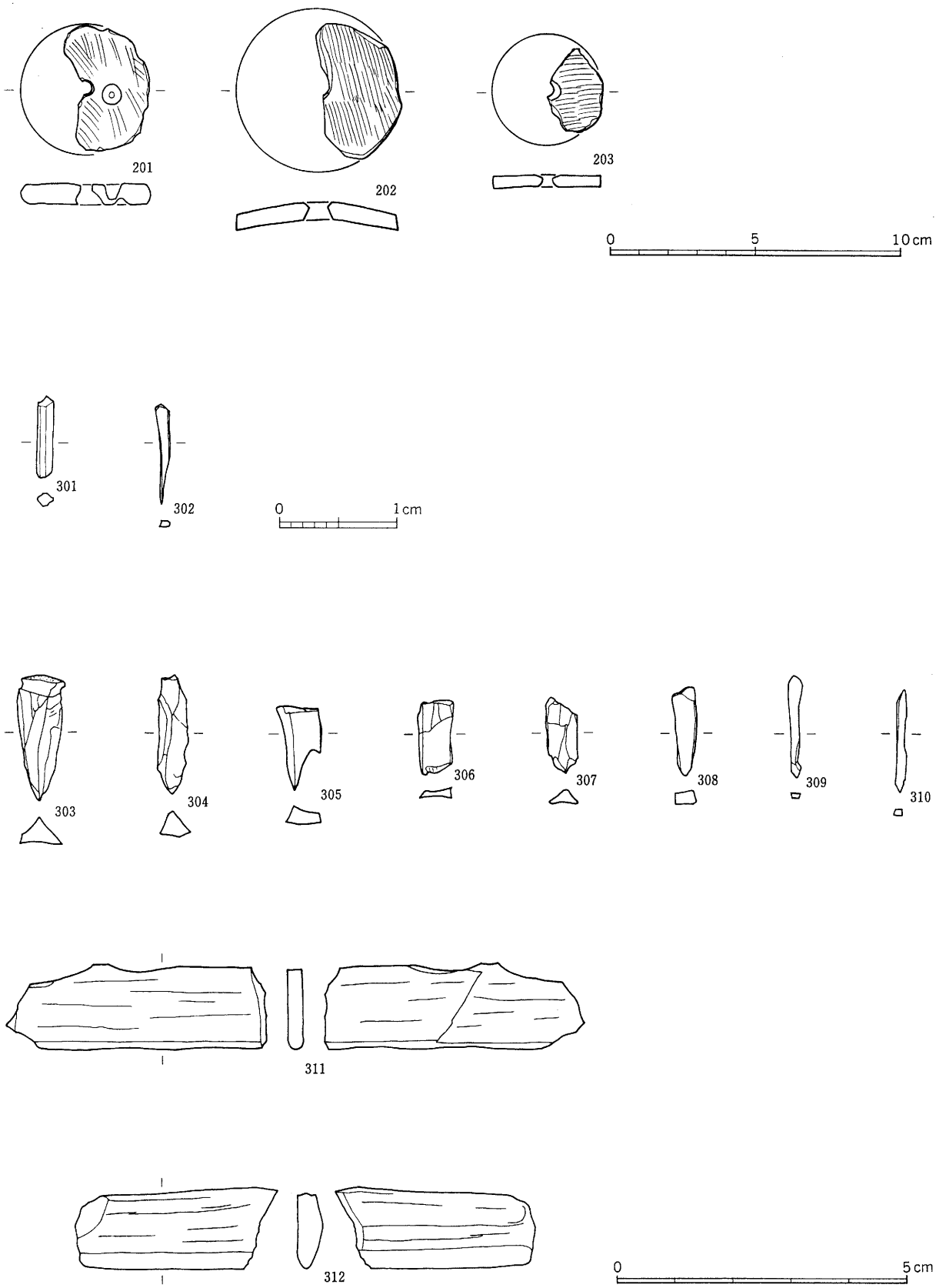

弥生土器

縮尺１／３

**図面四**　遺物実測図



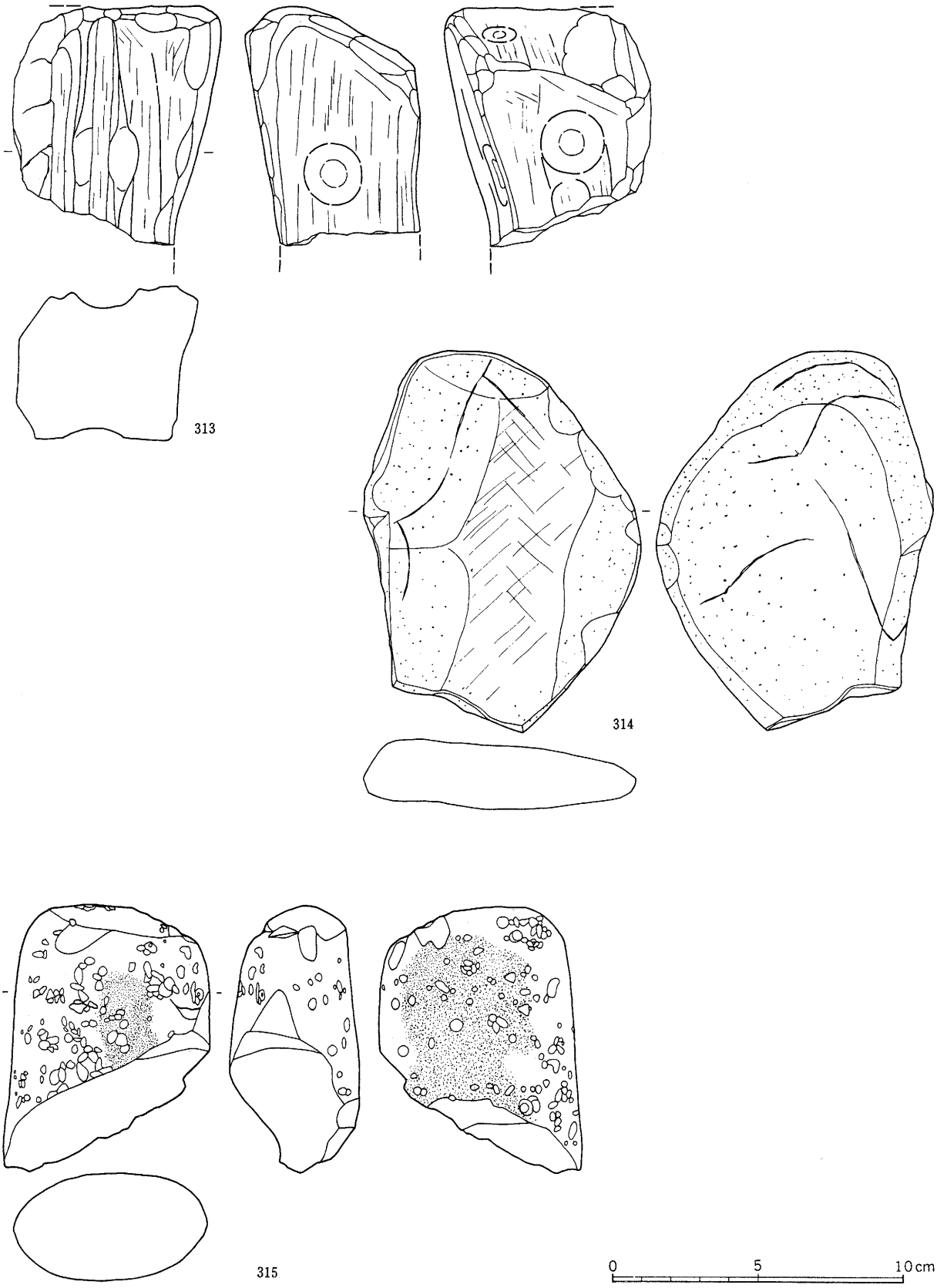

土師器　　縮尺１／３




土製品（土製紡錘車；201～203）　　縮尺１／２＝201～203，２倍＝301.302，実大＝303～312

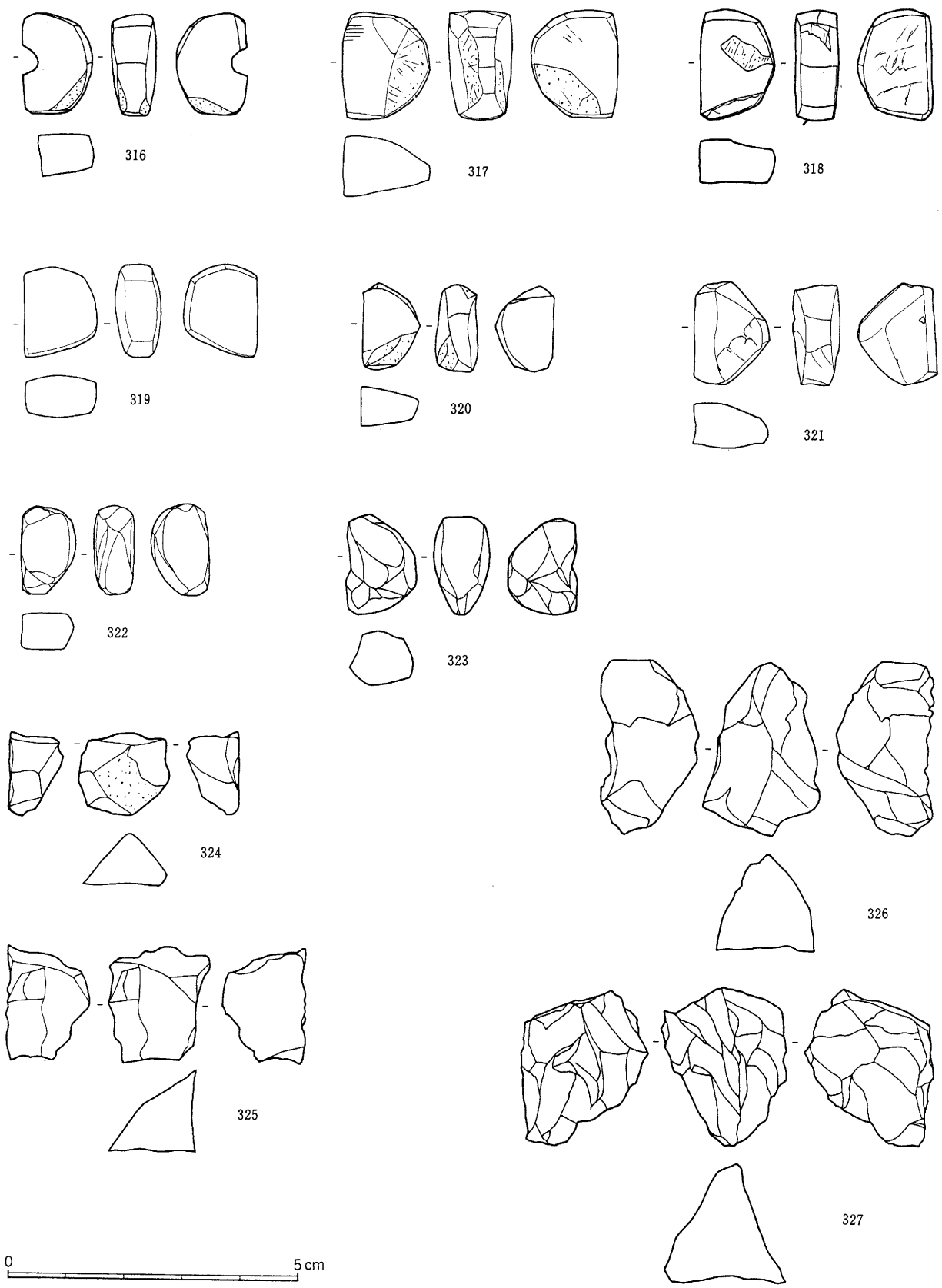
石製品（石錐；301，石錐状剝片；302～310，擦切具；311.312）

**図面六**　遺物実測図

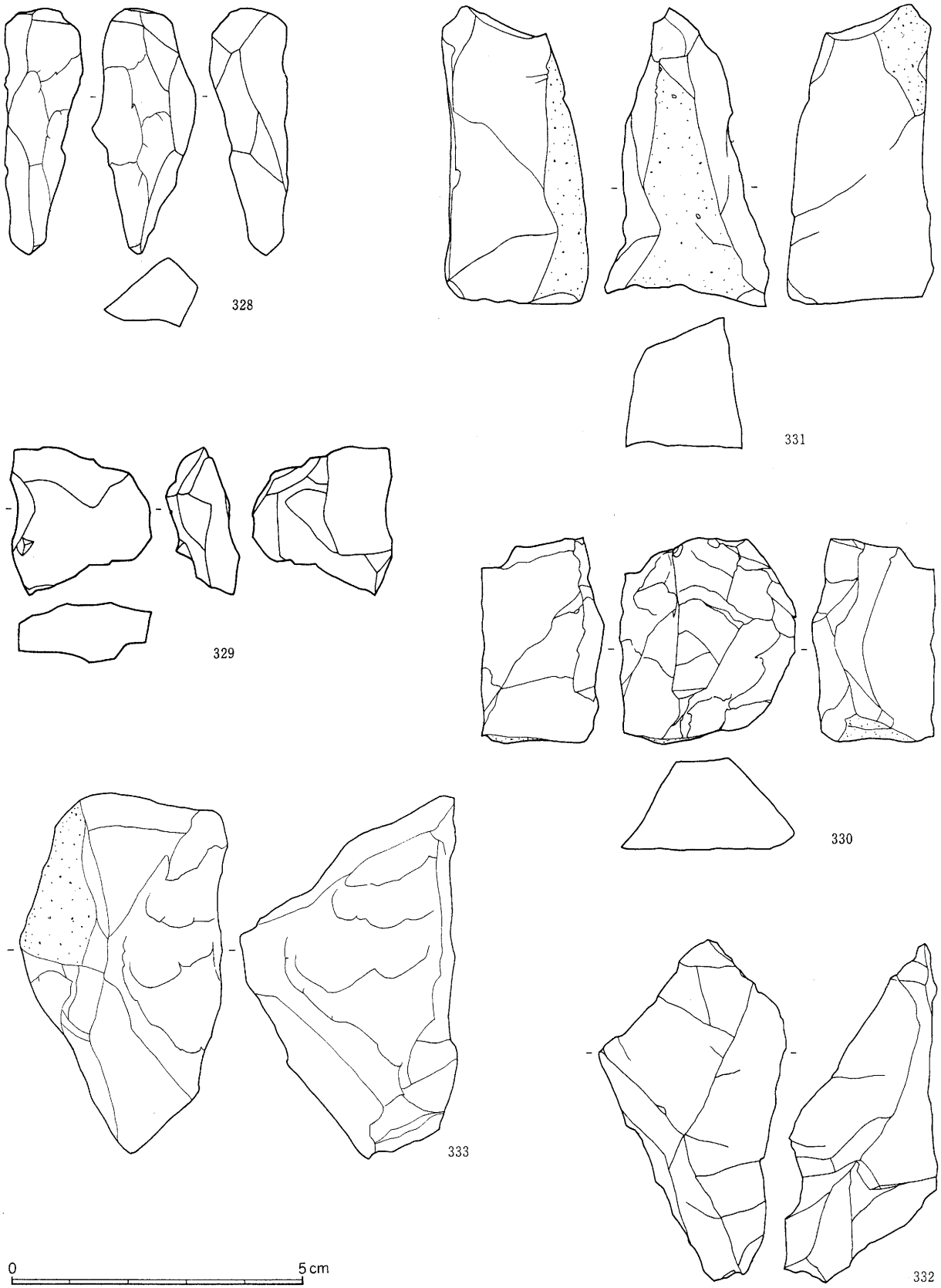



石製品（砥石；313.314,磨製石斧；315）

縮尺１／２

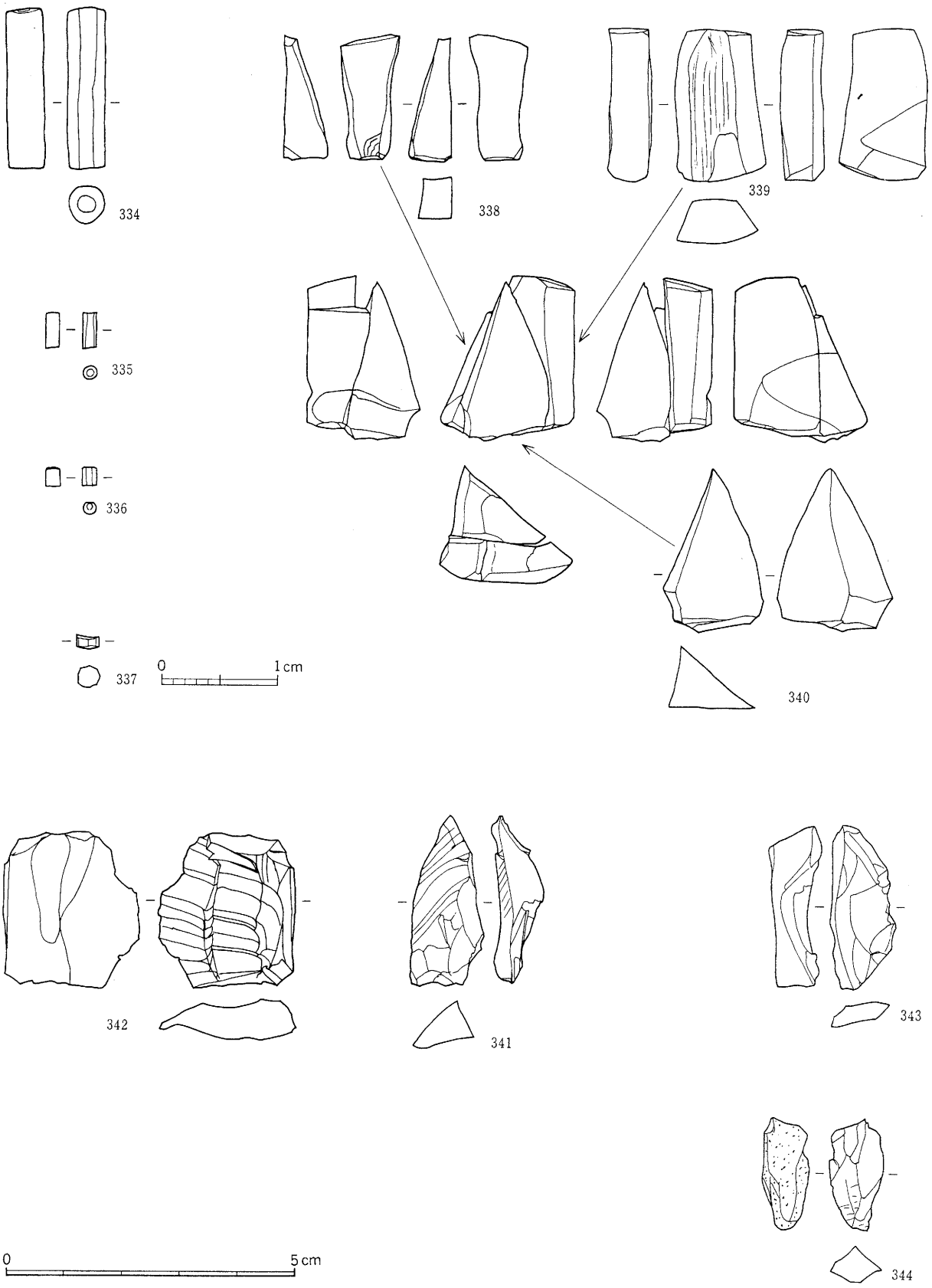



石製品（ヒスイ勾玉未製品；316～323，ヒスイ荒割品；324～327）　　実大

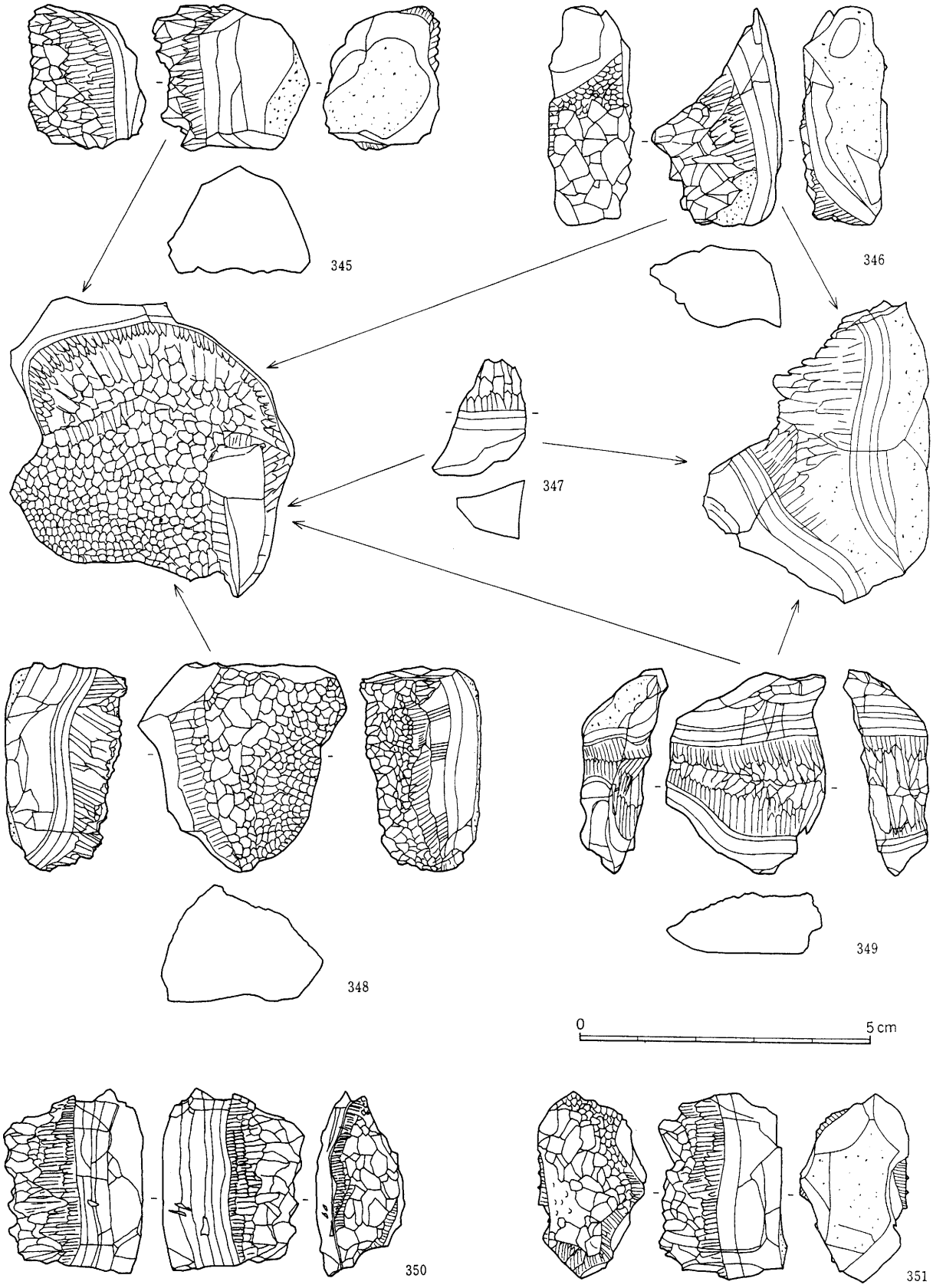



石製品（ヒスイ荒割品；328～333）

実大




石製品（緑色凝灰岩管玉；334～336，未製品；337，形割品；338～340，剝片；341.342。鉄石英剝片；343.344）　実大




石製品（玉髄荒割品；345～351）　　実大

1．全景（北東）

2．全景（上方）

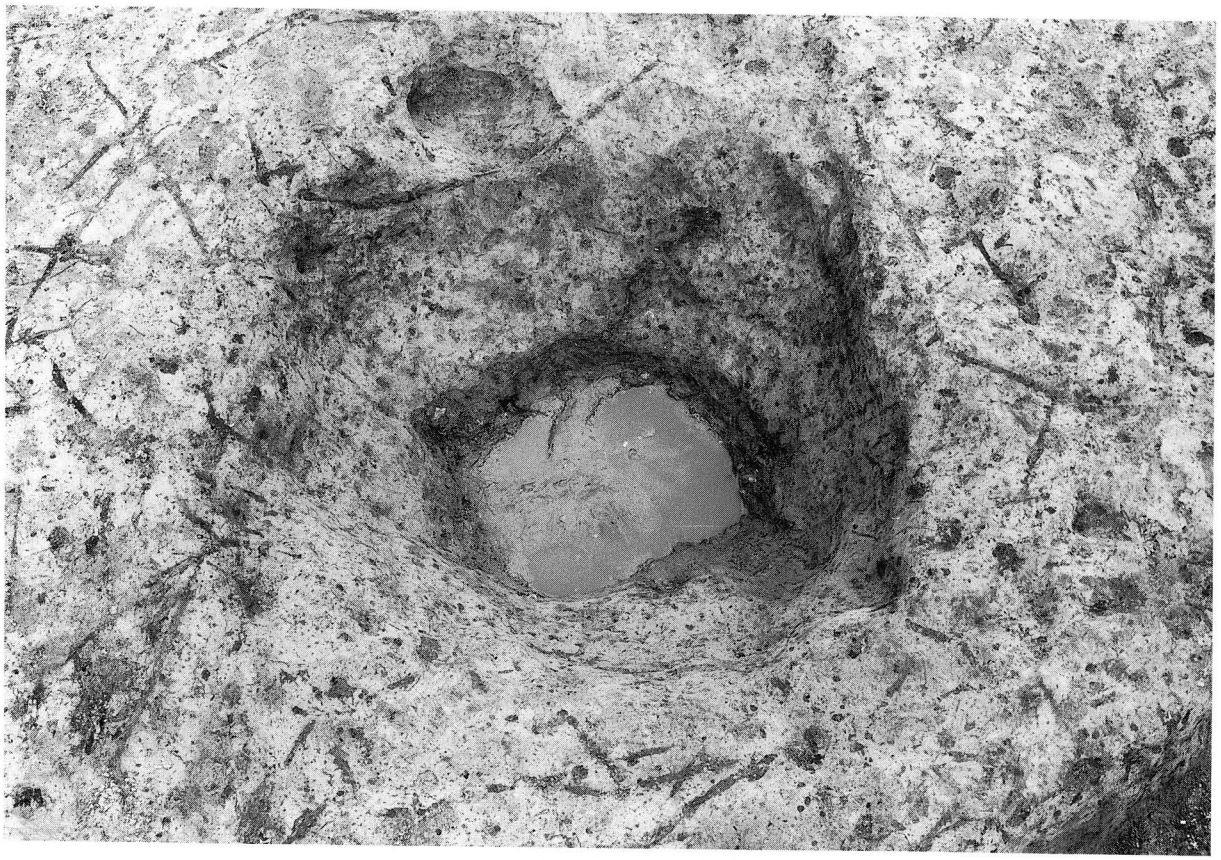
1．全景（北）

2．全景（南）

1．工房址ＳＸ07遺物出土状態（北西）

2．工房址ＳＸ07土坑遺物出土状態（北東）

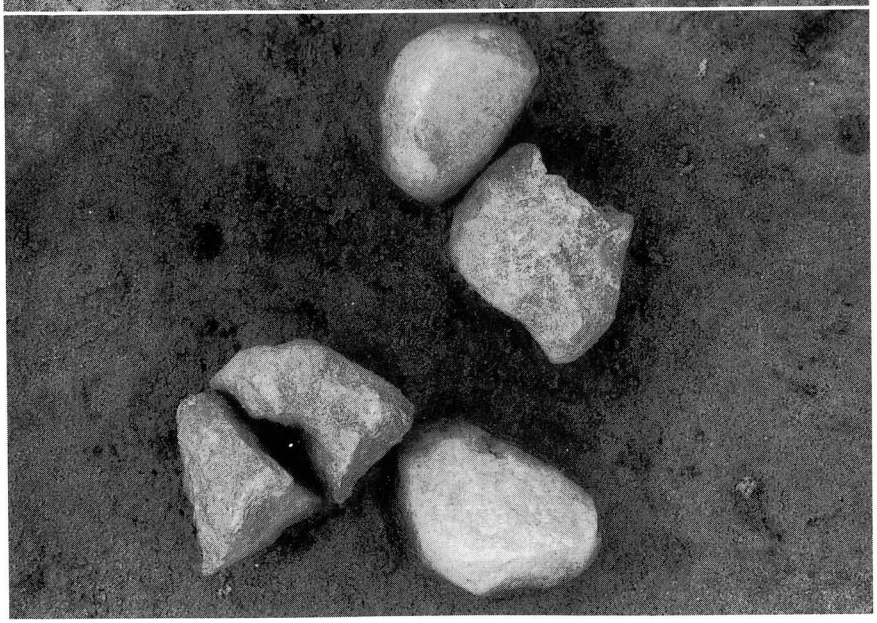
1．工房址ＳＸ07土坑全景（南東）



2．工房址ＳＸ07土坑全景（南西）

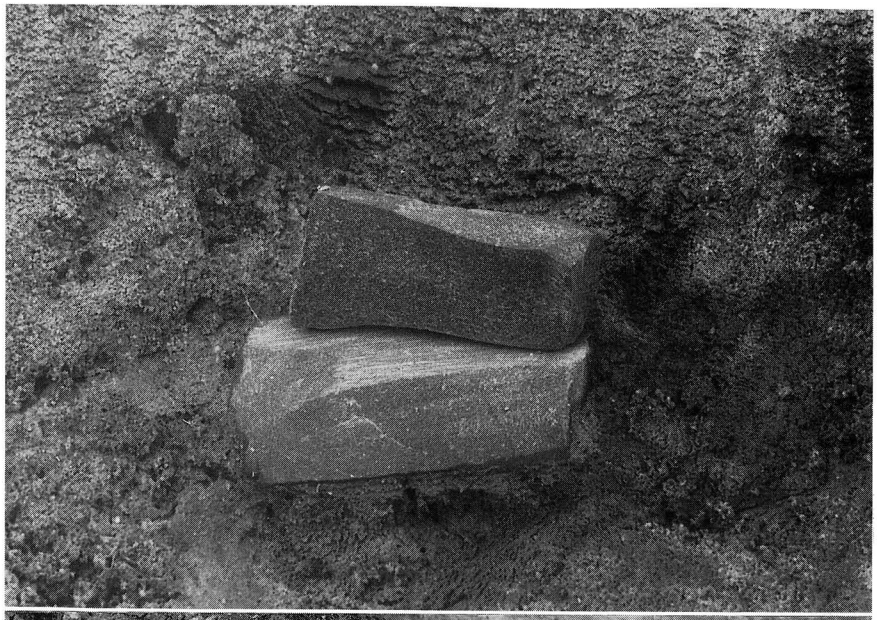
1．工房址ＳＸ07ヒスイ
出土状態（南西）

2．工房址ＳＸ07ヒスイ
出土状態（北東）



3．工房址ＳＸ07ヒスイ
出土状態（北西）

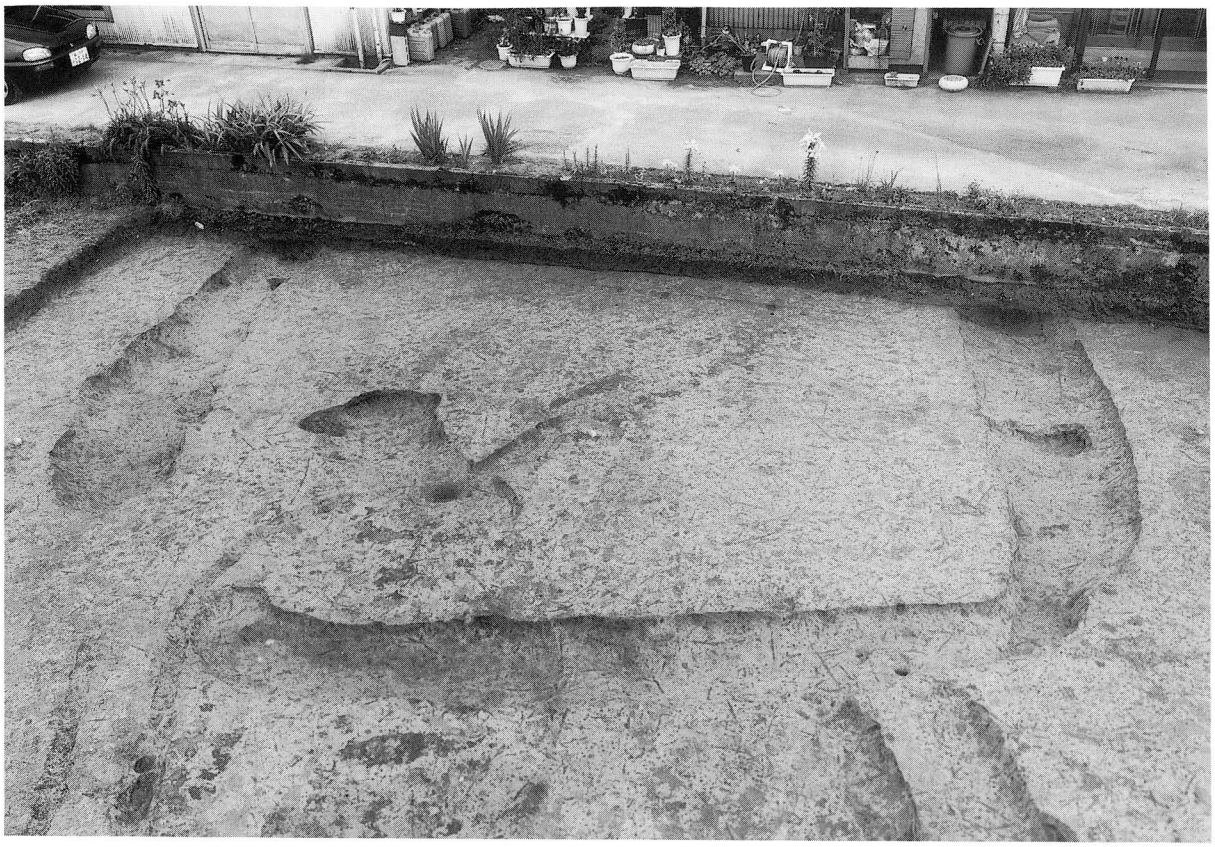
図版六　遺構



1．工房址ＳＸ07緑色凝灰岩出土状態（北西）

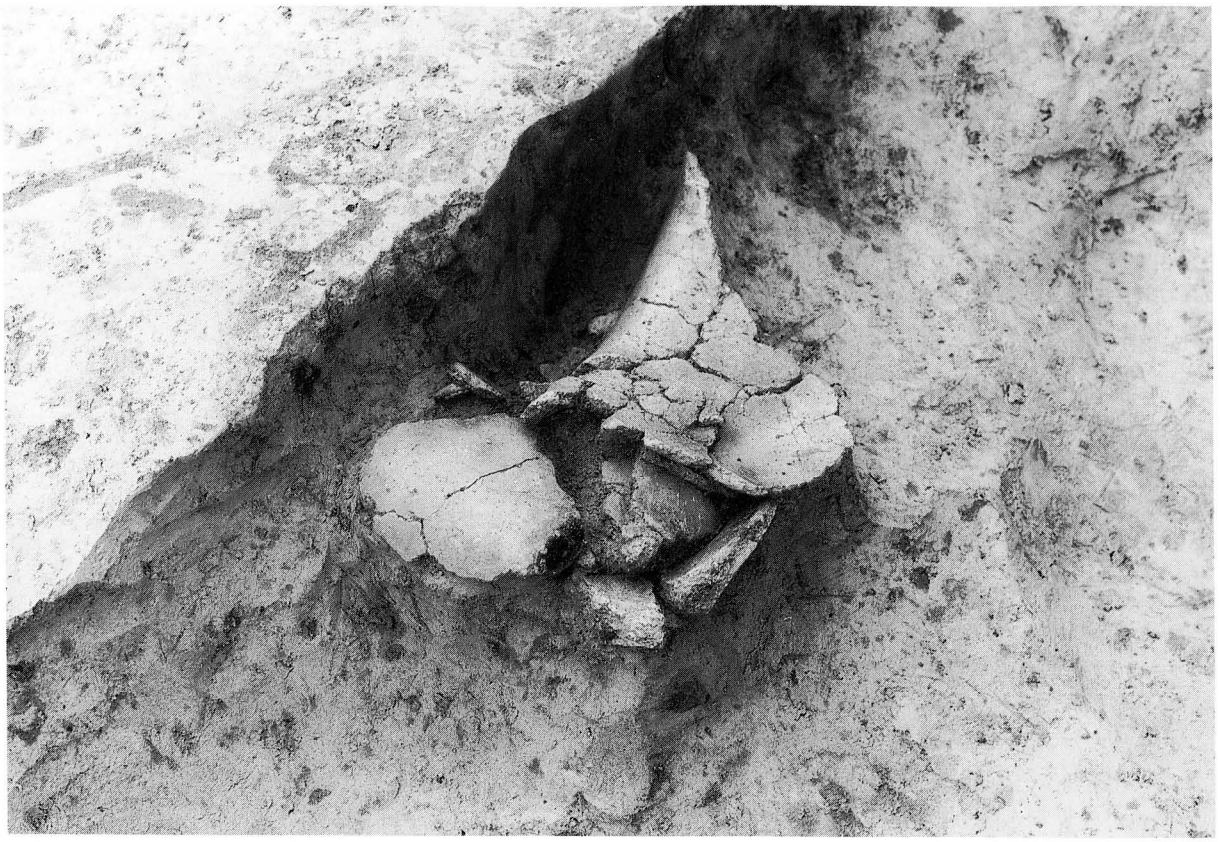
2．工房址ＳＸ07玉髄出土状態（北西）

3．工房址ＳＸ07土坑弥生土器出土状態（南東）



1．方形周溝墓ＳＺ07全景（北）

2．方形周溝墓ＳＺ07全景（西）

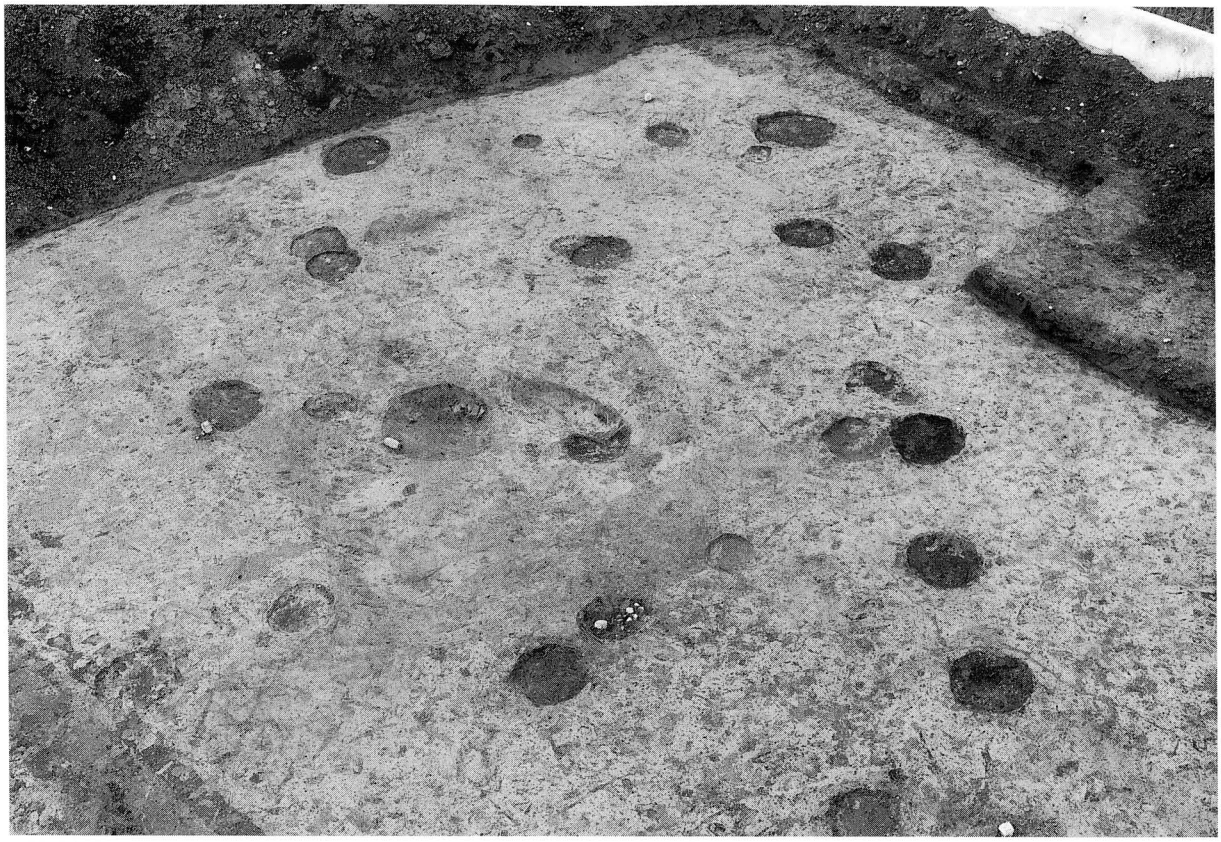


1．方形周溝墓ＳＺ07弥生土器出土状態（北西）

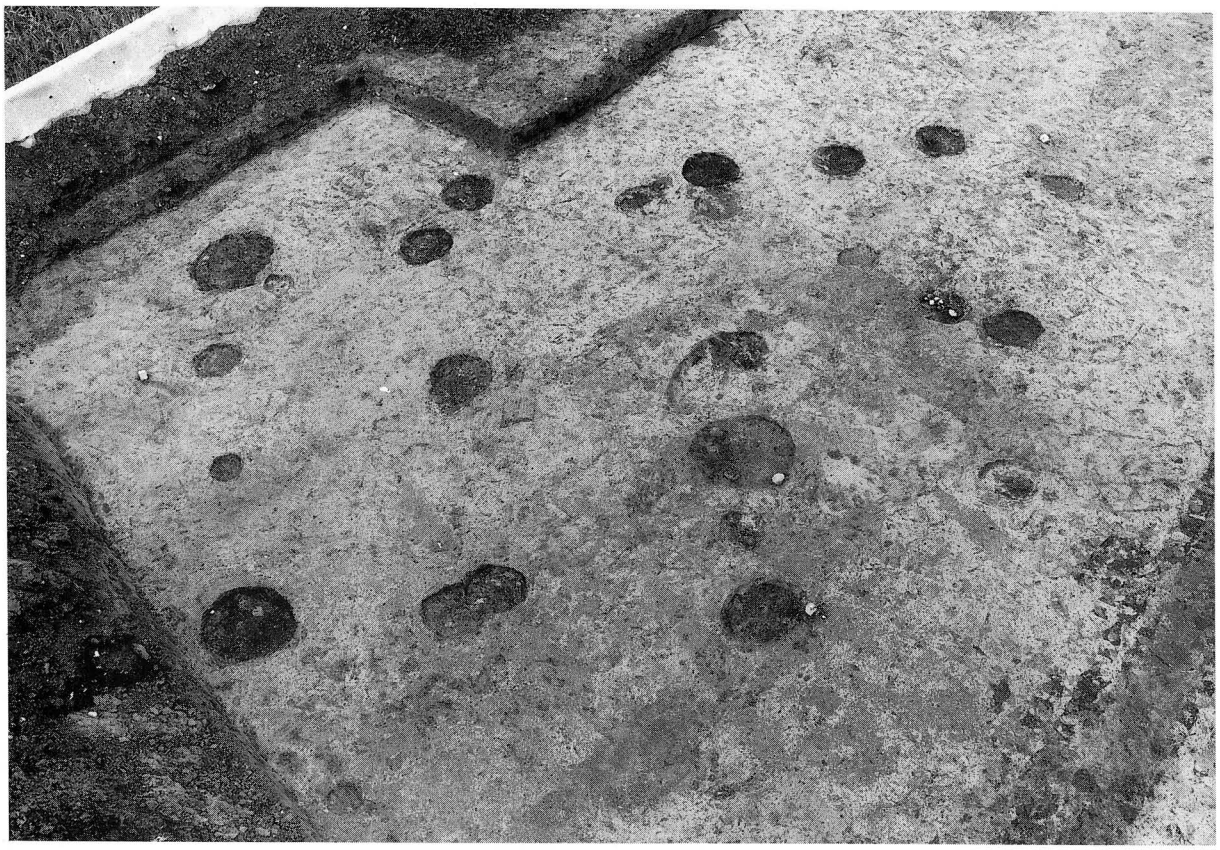
2．方形周溝墓ＳＺ07弥生土器出土状態（南西）

1．竪穴住居址ＳＩ01全景（北東）

2．竪穴住居址ＳＩ01全景（北西）



1．掘立柱建物址ＳＢ01・02確認状態全景（南西）



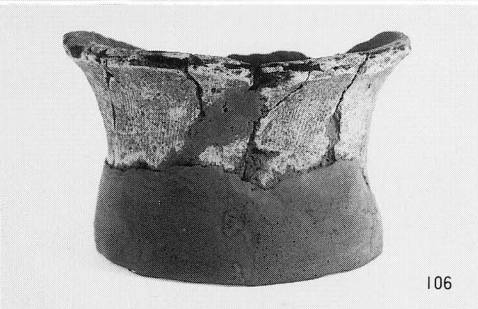
2．掘立柱建物址ＳＢ01・02確認状態全景（北西）

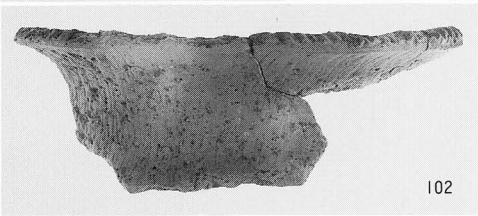
1．掘立柱建物址ＳＢ01・02掘上状態全景（南西）

2．掘立柱建物址ＳＢ01・02掘上状態全景（北西）

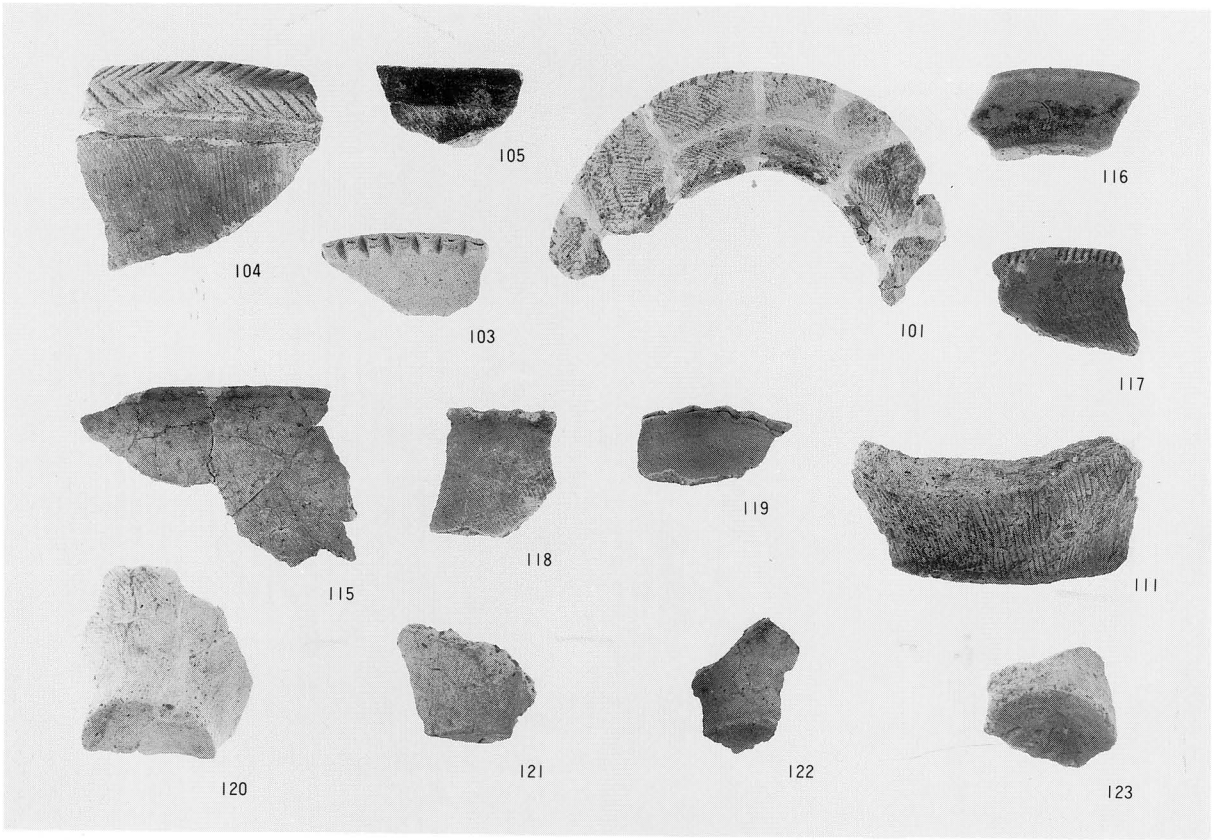
1．土坑ＳＫ88遺物出土状態（北東）

2．土坑ＳＫ97遺物出土状態（南）

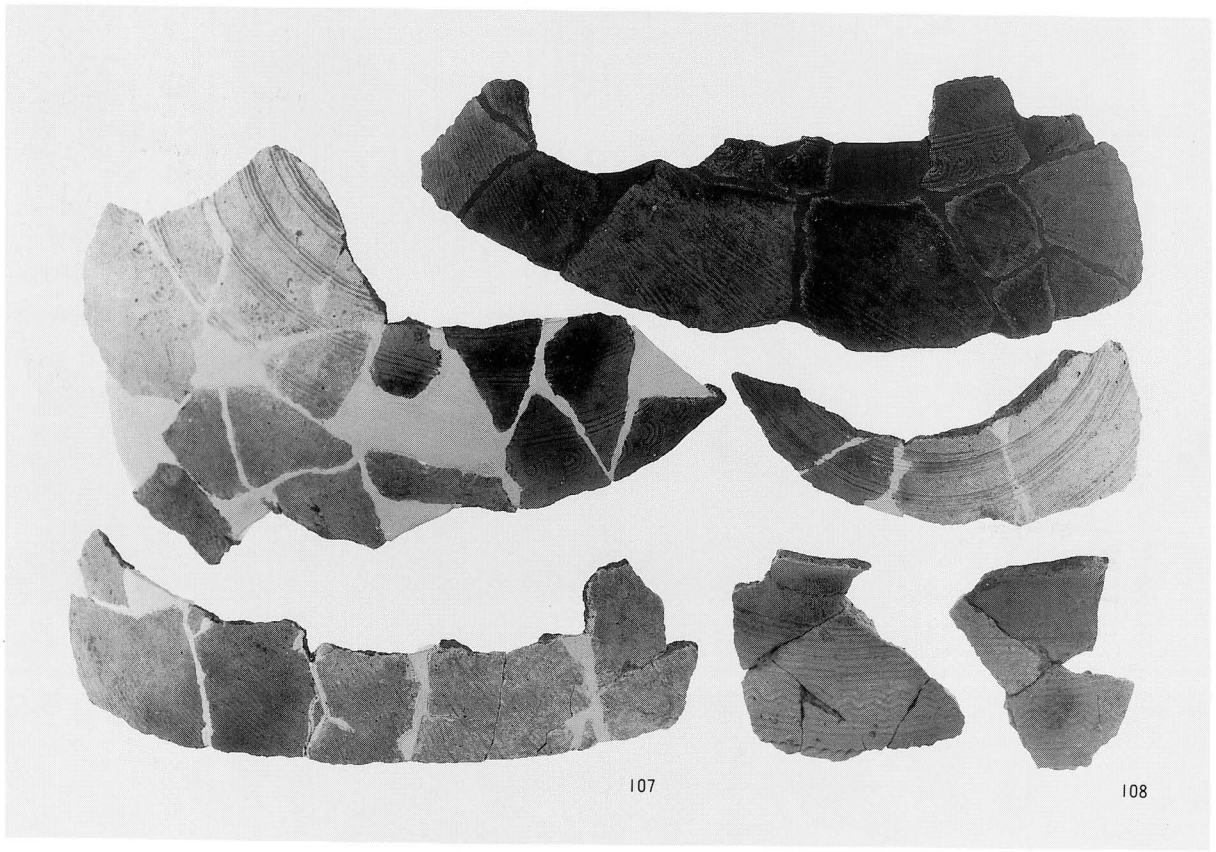


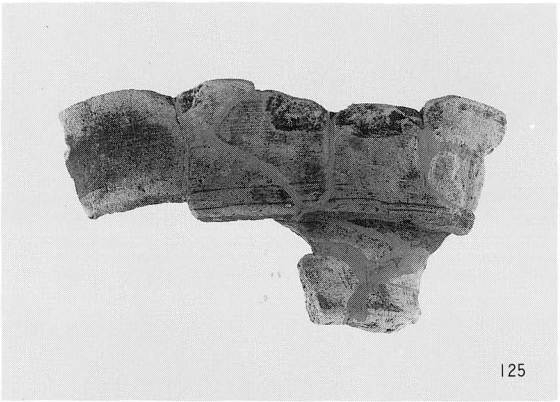
弥生土器

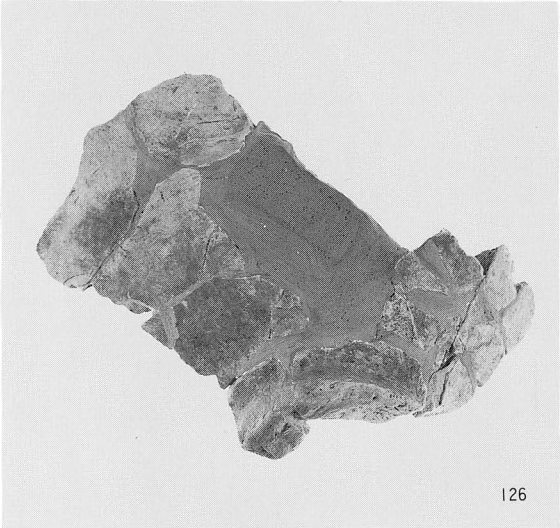


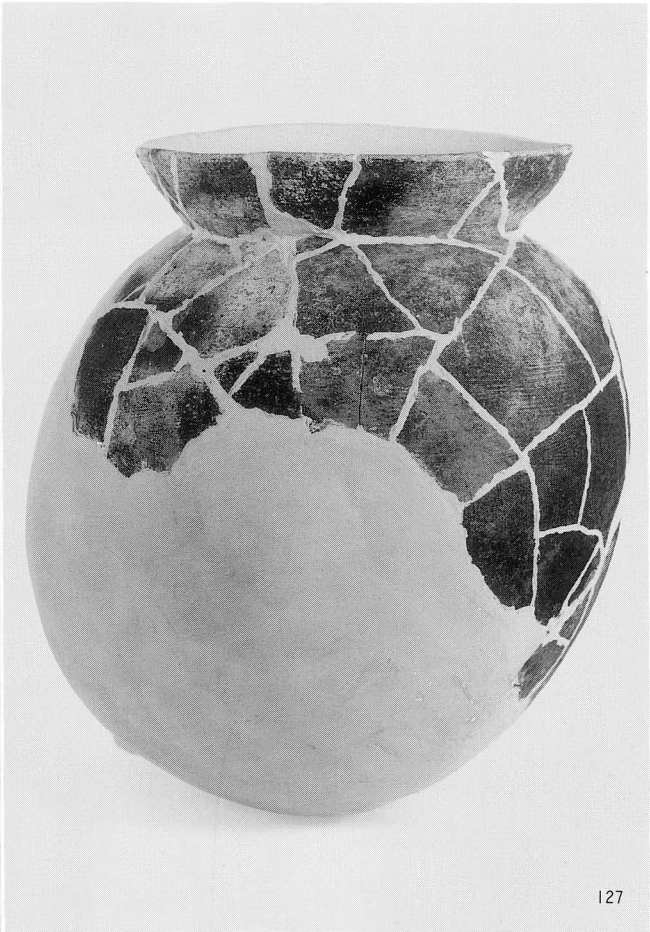

1．弥生土器

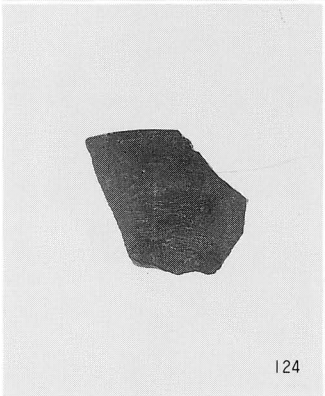


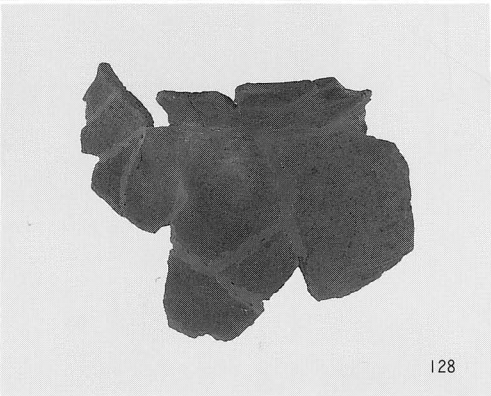

2．弥生土器

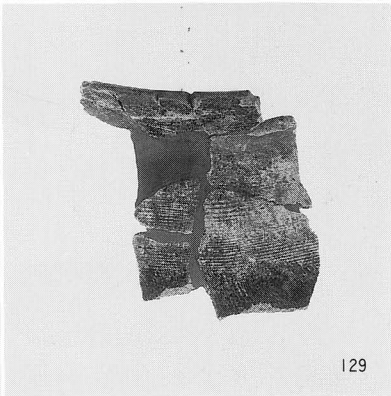


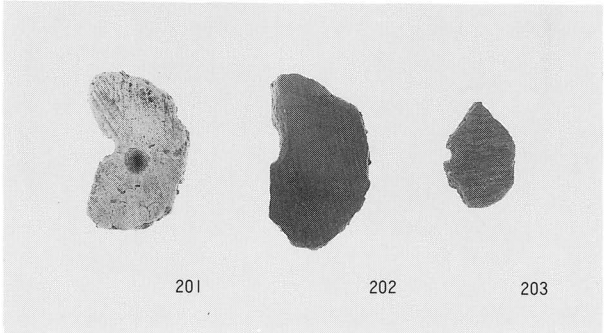



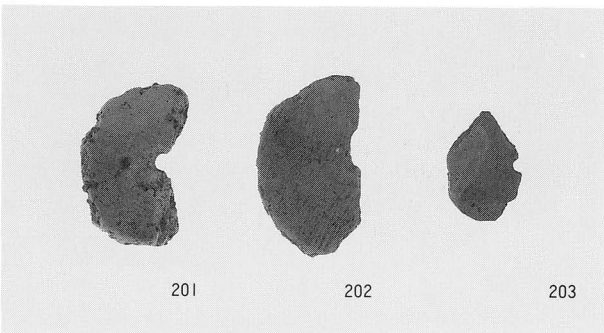



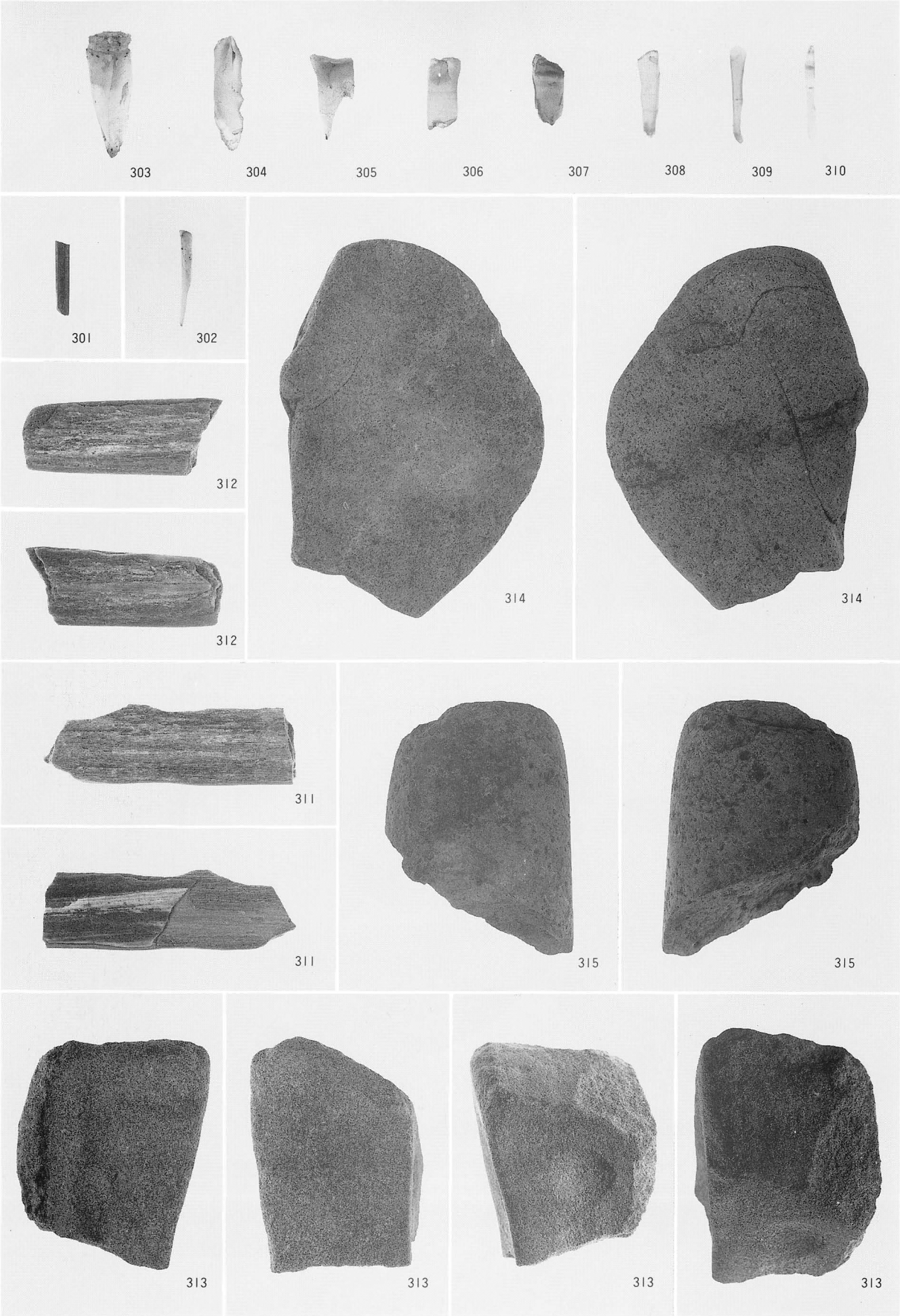




1．土師器

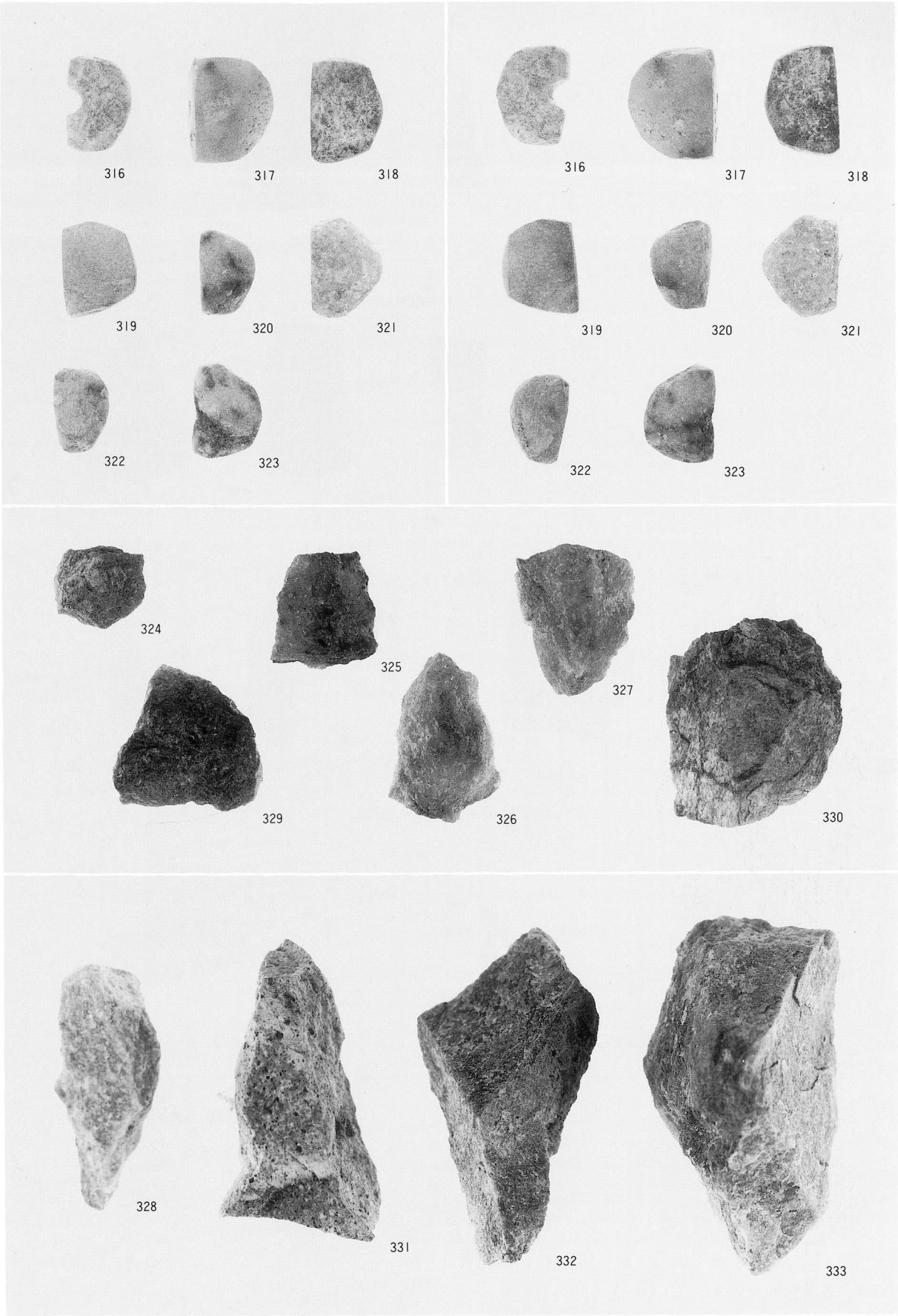


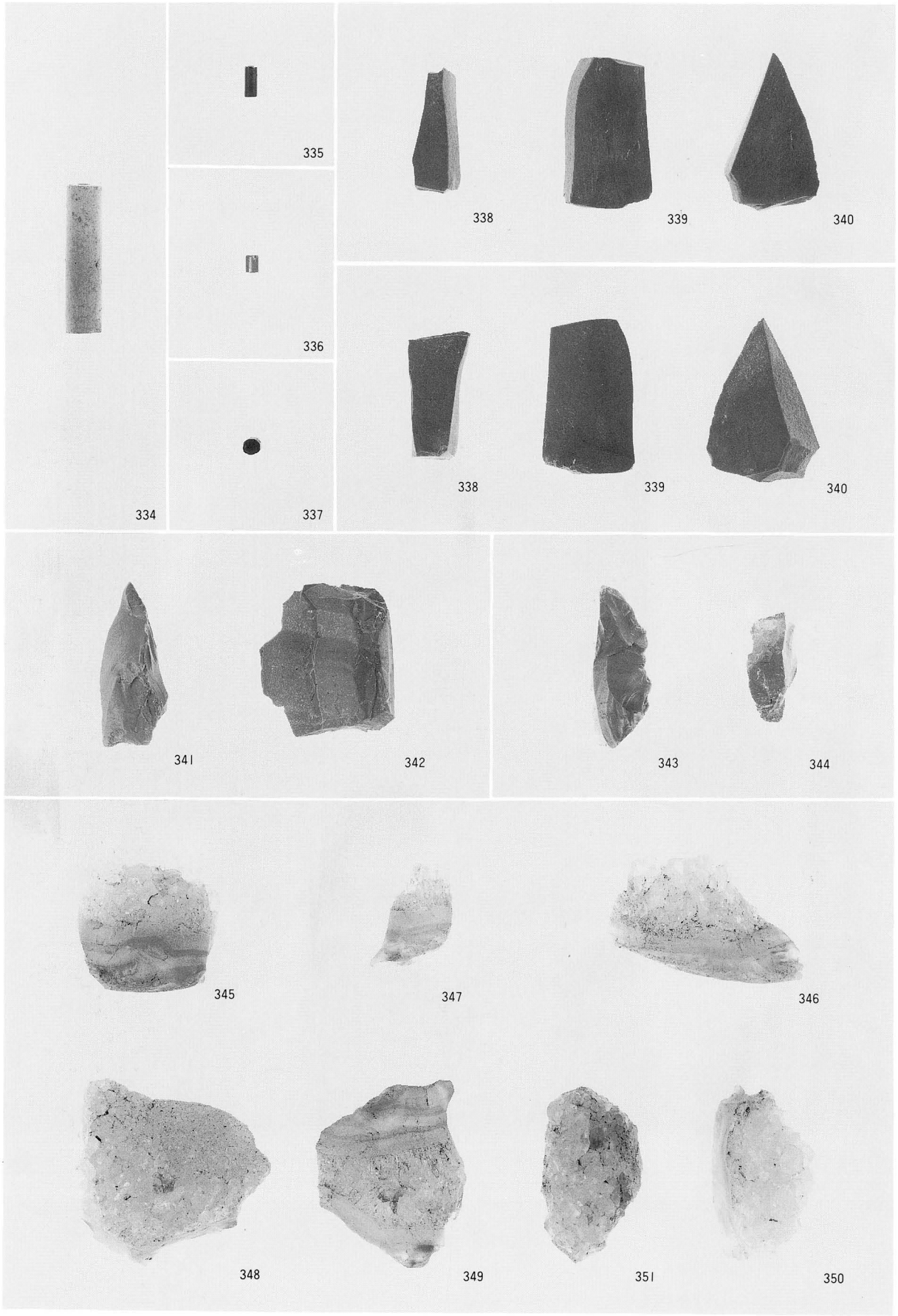

2．土製品


303
304
305
306
307
308
309
310
301
302
312
312
314
314
311
311
315
315
313
313
313
313

石製品


316
317
318
319
320
321
322
323
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
327
329
326
330
328
331
332
333

石製品


334
335
336
337
338
339
340
338
339
340
341
342
343
344
345
347
346
348
349
351
350

2．石製品

高岡市埋蔵文化財調査概報第27冊

石塚遺跡調査概報Ⅲ

発行者　高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

1995年3月31日

印刷所　小間印刷株式会社

富山県高岡市利屋町3